
candy days

歩生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

candy days

【Nコード】

N5300Y

【作者名】

歩生

【あらすじ】

仕事をクビになって彼氏を寝取られやけ酒煽ってぐでんぐでん。調子に乗って秘蔵の一本を開けようと手にしたところで、片手に日本酒で目の前には見知らぬ金髪美女。どうやら異世界に召喚されたようです。帰宅手段を探す為、という名目で私を召喚した彼女のもとに弟子入りしたら、10歳年下の少年少女たちと一緒に魔術学校に入学することに。しばらくは、帰れない。

1・0・酔っぱらいはくだを巻く(前書き)

初投稿です。

お見苦しい所もあるとは思いますが、よろしければお付き合いください。

1・0・酔っぱらいはくだを巻く

ちよつとちよつと、その外人さん！ そう、その金髪金目で
ナイスバディーのお姉さん！ あなた！ その左手に持った酒瓶は
なーに？ 何のお酒なの？ ウイスキー？ ブランドー？ はたま
たワイン？ ちよつと味見させてくれたりしない？ 私もさつき開
けたばかりのポン酒あげるからさーあ？ あ、飲んだことある？

日本酒。え、無い？ そつかー、じゃあまずは味見ていど、……
つてああ！ そんな一気に煽るもんじゃないの！ もつとこう味わ
つて、ん？ おかわり？ 気に入ったの？ あらまあ、顔に似合
わずイケるクチね外人さん。そうでしょそうでしょおいしいでしょ。
私のお気に入りなのよー。もう3年も前からこの酒蔵のファンで
さー、あ、そつちのもくれるの？ ありがとう！ 、くはつ！
なにこれうまつ！ こんな飲んだことないよ！ どこ産？ て
か分類は何になるわけ？ うーまーいー！ ナッツ？ これももら
つていいの？ なになに？ この酒と一緒に食えつて？ んっ！
まつ！！ すつ ごく合うねー！ あ、それならこのポン酒にはこ
つちの……あれ？ 漬物、さつき出したばかりなのに、あれ？
おつかしーな、どこいった？ あー、そう？ うん……。じゃあ
また今度ね！ こう見えて漬物には結構自信があるんだからね！
ぬか床を任されて10年！ 1日たりとも、……うん？ 歳？ 今
年で24だけど、何？ 同い年くらいでしょ？ 見えない？ あー、
もしかして、アジア人見るの初めて？ ほら良く言うじゃん？ ア
ジア人は童顔だって。それに ほら、私って背え低いからじゃない
？ ……ぶっ！ あはっははっ！ 無い無い！ あはははははは！
じゅ、18歳は無いわよ！ いくらなんでもそれは無理だつて！
あはは！ ひー、おつかしー。同い年かー、そつかー。よろしく
ーって、そういえば名乗ってなかったわね。私、漆原素子^{（しつげんすこ）}。24歳。
あんたは？

1・1 彼女は人間じゃないくらいに可愛かった

(起きてー)

もうちよつと寝てたい。

(起きてー)

(遊ばーよー)

「んー…」

目を閉じていても判るくらいには部屋の中が明るい。いくら土曜だからっていつまでも寝てるわけにいかないし、そろそろ起きないとなあ。

それにしても頭が重い。昨日は結構飲んだもんなあ。とりあえず水、水飲みたい。しょうがない、起きるか。

(水)

(水ーみずー)

ぼた、と顔に水が垂れた。

「雨漏り?!」

驚いて飛び起きると、見慣れない部屋とトンボみたいな羽の生えた小さい人間が目に入った。

「……………」

いやまてなにこれどうということなのちよつとだれかせつめいもとむ。

ここはどこで、目の前のやたらとファンシーな生き物は何で、隣りで寝ている金髪美女は誰で、ええと、あとは、さっきの雨漏りはどこからしたのかってことよ。

(雨漏りじゃないよ?)

(起きた!)

(ふあんしー?)

(遊ばー?)

(遊ば遊ば)

(モトコ、遊ぼ！)

「うん？」

待って、今私口に出してた？ 出してた、かも？ ああもうダメだ。十秒前の自分に自信が持てない。

一人暮らしが長いと独り言が多くなるって言うし、口に出してたのかも。

(喋ってないよー)

(モトコ、ひとり？)

うん、そう。一人暮らし。

(アーニヤと一緒だね)

口に出してないのに会話可能、ということはアレだな。この妖精さんみたいな可愛い生き物は私が作り出した想像上の生き物なんだな。

そういえばアルコール中毒者って幻覚が見えたりするんじゃないかな。つたつけ。

「はは……」

この歳でアル中とかやばいな。

(違うよー)

(違うよー)

自分で自分を慰めてることになるのかなこれ。それにしても私ってこんなに可愛い脳みそだったのか。

妖精さんの全長は大体15センチくらいで、体は人型をしているけど凹凸があるわけではない。そのくせ手足の指はきちんと五本あるし、顔だって一人ひとりの判別がつく程度には細かい。服は着ていないが、彼らの体は羽の先から足元まですべてが薄い赤や緑一色で、おまけにうっすらと発光していた。羽は向こうが透けて見えるほどに薄く、体の半分ほどの大きさのものが二枚背中から生えていた。

手近な妖精さんを観察していると、彼女(?)は恥ずかしそうに羽を震わせた。性別とかあるんだろうか。

(ないよー)

(なーい)

そっかー、ないのかー。さすが私、おおざっぱだな。

「さすがに変な色の子はいないのねえ」

玉虫色とかじゃなくてよかった。

(私、水！)

(風ー)

(月！ 月！)

「うん？」

(六個だよー)

六個。六色ってことかな？

(そうー)

ええと、さっき『水』って言ってた子は青で、『風』の子は白、

『月』が黒で、

(火！)

赤。

(地)

緑。

(日です)

黄、いや金かな。

これで六色か。確かに周りを見回すとその色以外の妖精さんはいない。

「ふーん」

きゃっきゃつと声を立てて笑いながら妖精さんたちは私の周りをふわふわと飛び回ったり、私の肩に腰かけてみたりと勝手に遊びだしている。

しかしそれにしても可愛い。小さいものはどうしてこんなに可愛いのか。かの清少納言も言ってた気がする。

(せーしょーなごん？)

ううん。ナシゴレンみたいな響きになってる。かわいいいいい！

ナシゴレン食べたことないけど。

あれ？ でも変ね。私が知っているはずのことを、この子たちは知らない？ 私の幻覚なの？

ふと、窓の外を見ると太陽の光が燦々と外の森と部屋の中を照らしている。黒い太陽から出た金掛かった光が。

「……………」

だいじょうぶだいじょうぶ。うん。これは私が作り出したんだから。天変地異とかじゃないはずだから。たぶん。おそらく。めいびー。

そおつと窓を押し開けると、外から少し冷たい澄んだ空気が入ってきた。部屋の中は案外淀んでいたらしい。鳥のさえずりが聞こえた方を見れば意外と近くの木の上に巣があるらしい。木の香りが気持ち良い。飲みすぎた次の日の朝にはちよつと眩しすぎるけど。

で、ここはどこなのかな？

(アーニヤに聞きなよう)

(アーニヤ)

「さつきも言ってたわねアーニヤって、…………この人？」

「んう……………」

悩ましげな声を上げて、ベッドで寝ていた金髪美女が寝返りを打った。その豊かな金髪は大きく開いたワンピースの胸元を彩っていて、まるで映画か何かのようだった。

これも幻覚かー。私って想像力遅しいタイプだったのか。知らなかったなあ。

「この人が、アーニヤ？」

(そつだよー)

(アーニヤだよ)

アーニヤ（と呼ばせてもらおう）の枕元には数冊の古びた本が積んであった。どうやら私と同じでベッドで本を読む派らしい。

本に手を伸ばす。タイトルは読めないが、表紙に直接彫つてある模様みたいなものは読めた。模様というか、これはもしかして、

「魔法陣？」

なんか、西洋魔法物の映画とかに出てきそうな円の周りに文字が書いてあったり複雑な模様を描いていたりするコレはもしかしてアレじゃない？

（そうだよー魔法陣だよー）

待て待て、なんでタイトルは読めないのに魔法陣は読めたの？

しかもこれは日本語（母国語）の感覚に近い。読むと同時に理解できるレベルだ。

24年間生きてきて魔法陣を読む機会なんて一度もなかったはずなのにどうしてこれが理解できるの？

タイトルをよくよく見ても、まずアルファベットではないし日本語でもない。漢字でもないし、見た目はアラビア語に近い気もするけど、単に達筆なフォントなのかもしれない。

「ねえ、これなんて読むの？」

（幻想種と信仰）

試しに私の腕にぶら下がって遊んでいた緑色の子に聞いてみるとすぐに返事が返ってきた。

私を読めない物をなんで読めるの？

「……………すごいねえ」

その頭を撫でてやると、緑色の子はうれしそうにパタパタと本の周りを飛び回った。かわいいなあ。

撫でた。そう、触れた。幻覚って触れるものだったっけ……………？

そついやさつきから私を遊具代わりにして遊んでたなあ、この子たち。

触れるし匂いもする。聞こえるし見えるし気配もする。あとは味があれば完璧ってことか。そついえば昨夜は飲んだな。おいしかったな。ナッツみたいなのも食べたな。あれもおいしかったな。いままでに食べたことのない味だったもんな。あつはっは！。

……………まじかー。

「え、え……………」

(まじー?)

(まじーか?)

(まじまじー?)

もしかしてもしかすると、ここは幻覚ではなくて現実?

(現実だよー?)

(現実う)

ちよつとよく思い出してみよう。そうだ、落ち着くのよ私。落ち着いているようで実は落ち着いてないとかよくやるじゃない私。

昨日、は金曜日で普通に仕事に行つて、帰ろうと思つたら上司に呼び出されて、クビになつた。

で、彼氏に慰めてもらおうと思つたけど電話がつかなくなつたから直接部屋まで行つたら友達だと思つてた女と二人で風呂に入つた。

むかついたから彼氏の部屋にあつた私の荷物を全部回収して、合鍵を置いて部屋を出た。

帰る途中、元彼にメール送つて着信拒否に設定して、買つてもらつたアクセサリーを売り払つて、そのお金で酒とつまみを買つた。

帰つてから、化粧だけ落として部屋着に着替えて、酒飲みながら元彼との思い出のあるものをゴミ袋に詰めて、それが終つたから秘蔵の一本を開けようと手にしたところで片手に日本酒で目の前には見知らぬ外人さん。はて? とお互いに首をか上げたところで外人さんが酒瓶片手なのを見て、女二人で酒盛りを始め、えつと……。後は覚えてないけどたぶん酔いつぶれて寝たんじゃないかな? で、今さつき起きた。と。

自分の格好を確認すれば飲み始めた時と同じ、下は高校のときのジャージには伸びきつたTシャツだ。

「うん、よくわかんない」

部屋で一人で飲んでたはずなのに、どうして……?

(どうしてー?)

(アーニヤが呼んだんだよー)

(仲良しー)

そういえば昨日飲んだ金髪の外人さんもアーニヤっていったっけなあ。てか、こいつか。

さて、さしあたってはこの寝こけている美女にいろいろと面倒を見てもらえたりしないかな。そうでなくともせめて現状確認くらいはさせてくれないかな。酒盛りした仲だし。

気持ちよさそうに寝こけている人間を叩き起こすのは趣味じゃないが、起こすか。

「ちよつと、そろそろ起きてよ。水飲みたいんだけどさ、ここってあんたんち？」

「水、水、欲しい」

うん。私も欲しいのよね。

「どこ？」

「だいどころ……水。みずー」

よろり、と亡霊のように歩く彼女について部屋を出てすぐ左の台所にある大きい甕から水を汲んで飲んでいた。

「のみすぎたー。ぎぼちあるーう」

「私にもちよーだい」

「はい。……」

「おはよう」

「おはよう、ございます」

そこでやっと彼女は酔いと眠りから覚めた目をした。あらかわいい。

背は高いしイイ体をしているけれど、顔は童顔なのね。世の男どもが放つて置かないだろうなあ。

「あなた、精霊さんなの？」

「人間よ」

失礼な。精霊って、この子達みたいな小さくて可愛くて羽とか生えてるこのことでしょうか？

「……まさか」

つぶやいて急いで先ほどまでの部屋に戻っていった。なんたる。私が部屋に入ると彼女は床に膝をついて、そこに描かれた大きな魔法陣を食い入るように見つめていた。

「ええと、うん、だから……」

「ねえ、」

「ひゃあ！」

声をかけると彼女は驚いて頭からコケた。痛そ……。

手を差し出すと恐る恐るといった様子で彼女は私の手を取った。

「大丈夫？」

「え、ええ。ありがとう……。あの、ご、ごめんなさい！」

「え？」

「そ、その、あの、あなたのこと、喚んだの私なの……」

「うん？ 酒飲み友達が欲しくて呼んだとかそういう？」

「あの、その、私、酔っ払って、幻想種を呼び出そうとして、でも失敗しちゃったみたいで、その、ごめんなさい！」

「とりあえずちょっと落ち着きましょうか」

大きな金色の瞳に涙をいっぱい溜めて必死に謝られてはまるでこちらが悪者みたいだ。

「ええ、ありがと……。あなたは、落ち着いているのね」

「ああ、あなたが寝ている間にこの子たちに色々教えてもらったから」

「ね？ と近くを飛んでいた金色の子に言えばねー？ と返してくれた。かわいいなあ。」

「精霊さんが見えるの？ いえ、喋れるのね？」

「最初は私の幻覚かとも思ったんだけどそれも言ってもらえなくなってきたからね」

「幻覚？」

「あなた、ここがどこかわかる？ 私はわからないわ」

「あ、ええっと、ここはヴィアン国の……いえ、きつとそういうことじゃないのよね。たぶん、なんだけどここはあなたがいたところ

とは別の世界よ」

「ああ、うん。まあ妖精さんを現実であると仮定したときからその覚悟はしてたわ」

さらにはさつき見たこの家の台所。ガスコンロも無いような辺鄙な所、日本じゃあまり思いつかない。

「それでね、その……」

「あなたが呼んだのはさつき聞いたわ。で、私は帰れるのよね？」

「……わ、わからないの」

「うん、まあ泣きそうなほど謝られた時からそんな予感はしてたんだけどね？」

「で、でも、喚べたんだから帰ることも出来るはず……たぶん」

また泣きそうになりながら彼女は私の両手を取った。

「帰るまでの面倒は私が見ます！ 安心して下さい！」

「あ、うん。よろしくお願いします」

なんだか、良い人そうでよかった。
ぐう。

「……」

「……お腹、すきましたね」

えへへと彼女は笑ってご飯にしましよと台所へ逃げた。
可愛いなあ。

1・2・ご飯の前には手を洗いましょう

「わあ、おいしそう。いただきます」

「いだ、ます?」

うん? そういえば「いただきます」も「ごちそうさま」も日本のニュアンスが強いつて聞いたことがある気がする。

「私の国では食べる前に言うの。意味としては料理を作ってくれた人とか食材を提供してくれた農家の人とか、自分の目の前にあったかいご飯が有ることへの感謝を表す言葉なの」

「へえ。素敵ね」

アーニヤは子供のような笑顔を浮かべた。なんだか、むずがゆいなあ。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

さて、それはともかくこの団子状の黒い丸いものはなんだろうか。ごま団子とかこんな感じかもしれない。いや、ごま団子はもっと灰色だった気がする。

えい。

「おいしい!」

よくわからないけど凄くジューシーでおいしい。お肉、なのかな? 肉団子? イカスミで味付けたら確かにこのくらい黒くなるかも知れない。

スパイスが効いてておいしい。

「あ、ええ、よかったわ……」

「何? あ、食べ方おかしい?」

スプーンをもうちょっと平べったくしたようなものを出されたから、てつきりスプーンだと思って食べてたけど違う使い方があったりするのかしら?

「ああ、いえ、あなた本当に精霊さんではないのね」

「もう。そう言ってるじゃない。でもなんで？」

「精霊さんは私たちみたいなお飯は食べないのよ」

へえ。そうなんだ。そういえばさつきからふわふわと飛んだりテーブルの上でかくれんぼしたりしていて、食材には手を出してはいない。

「ね、あ……えっと、そういえば自己紹介昨日したきりよね？」

「そういえばそうね」

これはいけない。いい大人のくせにその程度のことでもせずにご飯をご馳走になるなんて。

それにしてもこのイカスミスープ（飯）おいしいわあ。なんだろう、やっぱりだしなのかな。

「改めまして、私は漆原素子」

「私はアーネツカ・フラノワ」

「あーねか・うあんわ？」

「アーニヤでいいわ」

「じゃあ私のこともモトコでいいわ」

「？ あなた、ううしだらじゃないの？」

ううしだらって……やっぱり発音で難しいのね。

「え？ そうよ。漆原素子……ええと私の国では名字を先に、名前を後にするのが一般的だから、私個人を指すのは『モトコ』よ」

この赤い野菜？ みたいなのも甘くておいしい。ちよっと柑橘系の味がするけど。

「モ、ト、コ」

「なに、アーニヤ？」

発音を確かめただけだと分かっていたけれどその様が可愛らしくって、つい返事をしてしまった。

アーニヤは返事があるとは思わなかったらしく恥ずかしそうに自分のスープ皿に視線を落とす。

「……ううん。誰かと御飯食べるの久しぶりだからなんだか嬉しくって」

「私もよ。最近では彼氏ともあんまり会ってなかったし、両親はとくにいないしね。アーニヤは仕事か何かで一人暮らしなの？」

「あ、ううん。私も両親がいないから」

「なんか、結構同じだね確か歳も同じでしょう？」

主食はコレか。見た目はナンぽい！ 食べてもナンぽい！ 小麦粉を水で練って焼くんだからおなじになるのは当たり前といえは当たり前前なのかもなー。面白い。色は黄色いけど。

「24歳だったかしら？」

「そうよー。昨日もアーニヤ、私のことそうは見えないって言うってたわね」

「え、ええ。18歳くらいに見えるもの……」

18。ふむ、と自分の体を見下ろす。いつもと特に変わりはないので、東洋人は童顔に見えるというアレかと納得する。

24、なんだけどなあ。まあ若く見られる分にはほめ言葉として受け取っておこうじゃないか。

「そうだ、ねえモトコ、その、あなた魔術はどのくらい使えるの？」

「ま、じゅつ？」

探るようなアーニヤの視線に私は今聞いた単語が自分の聞き間違いだである事を祈った。

「ええ。その髪と眼の色でしょう？ あなたのいた世界ではどんな系統の魔術師だったのかしらと思って」

髪と眼の色がなんだって？

髪は一度も色を入れたり抜いたりしていないからそんなにひどい状態ではないと思うんだけど、何かマズイのかな。

私は自分の肩まで伸びている黒い髪と、アーニヤの胸の下まで伸ばされたウェーブがあった金髪を見比べた。

「魔術って、あれよね？ なにもないところから火が出たりとか？」

それじゃ手品か。

「まあ、できなくはないわね」

「……」

「？ モトコ？」

「無いわ」

「何が？ 系統？」

「『魔術』なんて私のいた世界には無かったの」

「え？ じゃ、じゃあ精霊さんは？」

「いないわ」

そんなファンタジーなものが見えるなんて言ったら黄色い救急車呼ばれるわよ。

（ふぁんたじー！）

（ふぁんたじー！）

言葉の響きが気に入ったのか、数人がふりふりと踊りだした。楽しそうだなあ。

「……………そう。モトコ、あなた、よく……………」

「正気でいられるって？」

踊る妖精さんを眺めながらアーニヤの言葉の先を言うと、彼女は驚いたように食器を鳴らした。

「！ あ、いえ、そういうつもりじゃ……………」

「いいわよ。自分でもちよっと落ち着きすぎだなって思ってる」

そう、どうもおかしい。なぜかすなりとこの状況を受け入れている自分がいる。普通はもうちよっと取り乱したり泣き喚いたりするんじゃないだろうか。

そんなことしたって帰れるわけではないし時間と体力の無駄だからしないけど。

そもそも、ここが現実であるという証明をするのは私が誰かという証明をするのと同じくらい難しい。

ならばもう、現実だと思えばいい。なぜなら夢だった場合、がんばっても悪いことはない。現実だった場合、がんばらないとまずいよってがんばろう。はい決定。

「ここが現実なのか私の想像なのかなんてこと考えたって仕方ないでしょう？ そんなこと悩んだり嘆いたりして帰れるっていうなら

そうするけど、そうでないのなら時間の無駄よ。貧乏暇なしってね。悩むのも泣くのも酒の席だけで十分よ」

「そう。そうね」

アーニヤはちょっと視線を彷徨わせてから口だけで微笑んだ。

「ごちそうさまでした」

「それもモトコの国の挨拶？」

「ええ。食べる前に言ったものの食後版でところね」

「へえ……。ねえ、モトコ、早速で悪いんだけど、生活する上でいくつか約束して欲しいことがあるの」

食後のお茶を飲みながら、アーニヤはそう切り出した。

「うん」

「まず、その髪と目の色なんだけど、ちょっと目立つのよね」

「そうなの？」

「ええ。この国の人の殆どは日ニシチの髪に火ヒの瞳なの」

（日はぼく！）

（火は僕）

日は金色、火は赤色のことらしい。

そういえばさつき妖精さんに教えてもらった気がする。

「黒い人はいないの？」

「いるとは思うけど、『揃った』人となるとなかなか……」

「揃った？」

「ええ。髪の色と眼の色が揃うと魔術師としては三流に見られるから悪い意味で目立ってしまうの」

「アーニヤも？」

「ええ」

金髪に金色の瞳のアーニヤは言われなくなかったのか私から視線を逸した。

「そんなに綺麗なのに、なんだかもつたいないわね」

それともこの世界では美醜の価値観が違うのだろうか。

「……ありがとう。モトコの髪と目も綺麗よ」

「それはどうも」

日本人はほとんどこの色なんだけど、話がややこしくなりそうだから黙ってしよう。

「あれ？ でも三流？ 別世界から人間を呼んでくるのってそんなに簡単なの？」

「いえ、その、三流、とは言われてるんだけど、その」

「アーニヤはすごいんだよー！」

（そうだよー！）

（しじょーさいねんしょうなんだから！）

（天才なんだよー！）

アーニヤが口ごもると妖精さんたちが一斉にアーニヤを褒め始めた。

「一流なのに三流って言われてるってこと？ なにそれ？」

「あ、あのね、魔術士は自分の体に宿している色の種類によって得意な魔術が制限されるって言われてるの。さっきの髪と目の色だと二色だし、例えば日火ニツカの髪に火水カスイの瞳なら三色ね」

「ニツカ？ カスイ？」

知らない単語が出てきたぞー。多分色の名前なんだろうけど。

（日火はぼくとー、）

（ぼくー！）

金色の子と赤色の子が二人で手をつないでくると回りだすと、その二人の周りがぼんやりとオレンジ色になった。

（火水は、私と）

（オレ！）

赤色の子と青色の子も同じように回ると、今度は紫色になった。ということは、オレンジ色の髪に紫色の瞳で金と赤と青で三色ってことなのかな。

「宿していない色の魔術は使えなくはないけれど努力が必要になってくるわ。だから三流と言われるの」

「それで、一色しかないアーニヤはなんで天才なの？」

「て、天才だなんてとんでもない！ 私は、ただ、精霊さんたちとお話できるから他の人よりも少しだけ上手くできるだけよ」

消え入りそうな語尾でアーニヤは直ぐ側にいた妖精さんを手の上に乗せた。

「お話、て普通できないの？」

朝、その子たちに起こされたんですけど？

「ええ、普通は見えないし聞こえないし触れないし、喋れないわ」「喋れない？」

「実はね、さつきからこうして私たちが話しているのは『精霊言語』と呼ばれる言語で、魔方陣を描いたり呪文を唱えたりするとき使うもので普通は楽しくおしゃべりするのに使わないのよ」

「じゃあ、アーニヤも普段は違う言葉で喋ってるの？」

「*****、よ」

「え？ なんて言ったの？」

聞き取ることすらできなかった。人の名前とか『いただきます』とか知らない単語でも聞き取れることはできたはずなのに。

「『大陸言語』っていうの。でも、そう。大陸言語が使えないの…」

…

もしかしてさっきの本のタイトルもその大陸言語だったのかな。

(そうだよー)

(僕たち読めるー)

「たぶん、モトコを召喚した時の魔方陣が『幻想種』を呼び出すときのものを改良したものだから、そのせいでモトコはこの世界では精霊としての役割もしくはそれに近い能力が付加されたってことかしら？ だとすると」

専門用語わかんない。

アーニヤはぶつぶつと考察を続けている。

「アーニヤは妖精さんとお話できる天才だから一流になれた、てことね。で？ 私の髪と目の色が揃っていると三流として悪目立ちするからどうするって？」

「あ、ええと、色を変色させる薬を飲んでもらうわ。大丈夫。私も普段飲んでるものだし」

できればそういう得体の知れない物は遠慮したいところである。朝ごはんをたつぷりごちそうになった身ではあるが。

「それこそ魔法でどうにかすればいいのに」

「他の魔術師には私が魔術を使っていることがわかってしまうのよ。それじゃあ自分が怪しい者ですと言っているようなものだもの、変化させた意味が無いわ」

なるほどー。いろいろ大変なんだなー。

「それに、『揃った』人間は珍しいから下手をすれば売られたり研究材料として捕まる可能性もあるわ。特に、モトコは異世界人だし」さらっと怖い事を言ってくたさる。

「大人しく飲みます」

「さつきも言ったとおり、精霊さんとおしゃべり出来るのは本当に珍しいことだから、人前で話しかけたり触ったりしちゃダメよ」

「でも、この子達の方から心を読んでくるよ？」

「それはきつとモトコが焦っていたんじゃないかしら。強く思ったことは精霊さんに聞こえてしまうの。そうでないことは聞こえないから大丈夫よ」

確かに、起き抜けの頃は妖精さんが心の中を読んできていたけれど朝ごはんを食べ終わった今は全くそんなことはない。

「あとはそうね……、そういえばさつき『妖精さん』て言ったかしら？」

「言ったわ」

「その、この世界では彼らのことは『精霊』と呼ぶの。『妖精』は別にいるのよ」

（なになに？）

（僕たちの話？）

（僕の話？）

寄ってきた妖精さん、ではなく精霊さんを軽く撫でてやれば小首

をかしげて満足そうに飛んでいった。

「ふうん。やっぱりいろいろいるのね」

ファンタジーは魔法と精霊さんだけで十分なんだけど、アーニヤの口ぶりからして他にもそのテの存在がいるんだらうなあ。もう何が出て驚かないわよー。

「あとの細かい注意事項なんかは気が付いたらまた言っわね。着替えは私ので大丈夫かしら？」

「ダメじゃないかな」

私は158センチと小柄な方だが、アーニヤは170センチくらいある。更に胸のサイズが違いすぎる。私は一応Cではあるがアーニヤはグラビアアイドル並みである。ぜひ一度触らせていただきたい。ではなく。

「うーん、でもその格好で外に出るわけにもいかないし」

前述のとおり、私は部屋着である。ついでに言えばはだしである。そろそろ足の裏が冷えてきている。

「そういえば、アーニヤはここに住んでるの？」

窓からは木しか見えないのでここが森か林の中であることはわかるが、妙齢の女性が一人でそんなところに住むものだろうか。

「違っわ」

硬い声でアーニヤは言った。

「私ね、私、逃げてきたの」

1・2・ご飯の前には手を洗いましょう(後書き)

アクセス、お気に入り登録、とても嬉しいです。ありがとうございます。

1・3・いつだって、誰かに頼って生きてきた

「いい大人なんだからそれはまずいわよ」

私みたいにクビになったのならともかく。

元の世界に帰ったら、就職活動から始めないとなあ。ちくしょう、あのハゲ上司め。

「それで？　なんでそんなことになったの？」

「え、えつと……」

アーニヤはすっかり冷めてしまったカップの縁をそつと撫でて、ゆっくりと口を開いた。

「私ね、教師になりたいの。でも私が行きたい学校、母校なんだけど、その教師になるには一番弟子を学校側に認めてもらわなくちゃいけないの」

「認めてもらうって？」

「手段はいろいろあるんだけど、最低でも学校に入学することができれば師匠の方も研修を認められることになってるの。……でもね、私、一色でしょう？　だから、弟子になりたいって言うてくれる人がいなくて」

口の端をわずかに持ち上げて自嘲する。精霊さんたちが心配そうにアーニヤの髪や指先に触れているのを私はただ黙って見ていた。

「でもね、今年は私のお師匠様のお知り合いだって言う方に、紹介してもらわずだったの。条件は私が一年間研究員見習いとしてその方のお手伝いをするの。でもね、だめなの」

ただでさえ白い顔がさらに白く見えるほどきつく、アーニヤは眉根を寄せた。

「紹介してもらった人、別の方のお弟子さんなの。一番弟子だけは他の魔術師との重複は認められないのよ」

「それ、知ってて紹介してきたってこと？」

緩慢な動作でアーニヤは首を縦に振った。

酷い。

「本当はね、精霊さんが教えてくれたから、紹介されてすぐにこの人はだめだってわかったの。でも、精霊さんとお話してできるって誰にも言えないから、私……………」

泣きそうな気配に精霊さんたちが慰めようとアーニヤの周りを飛び回る。ふわふわと、きらきらと。

不謹慎だけど、それはとても幻想的で目が離せなかった。

「もうすぐ約束の一年が過ぎるんだけど、どうしてもその人を弟子にしたくなくて、休暇なのをいいことにこんな所まで逃げてきちゃった」

「そう……………。でもそれならお弟子さんを断ればいいじゃない」

「そう、なんだけど……………」

「断りづらいの？」

「……………ええ」

いたなあ、こういう人。自分はちつとも悪くないのになぜか言えなくて損をする人。

「じゃあ、教師になれなくてもいいのね？」

「それは！……………嫌よ」

「じゃあ言わなくちゃ。ね？」

「え、ええ……………」

こういう時は、肯定の言葉を発しているうちに事を進めてしまっに限る。

「それじゃあ早速そのお手伝いしてた人の所まで行きましょうか」

「あ、その人ならすぐそこまで来てるわ」

（来てるー）

（来てるよー）

（アーニヤがないから探してるよ）

えー、休暇なんじゃなかったの？ 休日出勤を強要しに来たとか

？ それも最悪だな。

でも、会いに行く途中でアーニヤの心が折れるかもしれないこと

を考えると、手間が省けたわね。
「なら、お断りしに行きますか」

「ああ、こんなところにいたのかねフラノワ君」

「お、お久しぶりです、教授」

森の中程まできた所で、やっと教授とやらに出会えた。私はアーニヤと教授の顔が見える茂みに隠れて精霊さんたちと一緒に事の成り行きを見守っている。がんばれ、アーニヤ。

第一印象としては『偉そう』これに尽きる。丈の短い赤いマントに隠れて上着は見えないが、下はきれいにプレスされた黒のスラックスで靴は同じく黒の皮靴だった。アーニヤの質素な生成のワンピースとボレロとは大違いである。私はといえば、小屋を出る時に時間も服もなかったのととりあえず部屋着の上にアーニヤのマントを羽織っただけだ。

「休暇は構わないが、どこへ行ったのかわからなかったから探してしまっただよ」

「それは、お手数をおかけして申し訳ありませんでした……」

「いやいいんだ。そろそろ休暇も終わる。どうだい、一緒に帰らないかね？」

「いえ、あの……私、」

がんばれ。

(がんばれー)

(れー)

(アーニヤー)

「わたし、助手を降りさせていただきたいんです」

「……そうなる、弟子の件も紹介できなくなるがいいのかね？」

「はい。構いません」

「もしかして彼が何か失礼でもしたかね？ それならまた別の人を探してこよう」

「いえ、そういうわけではないのですが」

「では、君は私が骨を折って探してきた弟子候補を自分の都合で断るといふのかね？」

二人が何を話しているのかは全くわからないが、段々とアーニヤの顔色が悪くなり、おっさんの方は憎たらしい笑みを浮かべ始めた。あいつ、なんなの？

(いつもいつもいじわるするの)

(アーニヤ悲しそうな)

まじか。悪い奴だな。

(くるなー！)

そうだー！ どっか行けー！

(そうだそうだー！)

私は存外アーニヤが気に入ったのだ。

自分の思っていることをはっきり言えない人間はあまり好きではないはずなのだが、彼女はそれでも『教師になりたい』と私に告げた。それだけはつきり言えれば十分だ。

あのおっさん、早く諦めてくれないかな。

(そうだー！)

黒い子たちがわーっと飛び出した。

え、何々？ どゆこと？

「***！」

やば。見つかった。

おっさんは明らかに私の隠れている茂みを見ている。

普通の人には精霊さんは見えないんじゃないのかちくしょう。

アーニヤの顔色が変わった。マジゴメン。視線で謝りながら仕方なく出ていくと睨まれた。アーニヤが。

「ふん、子供か。彼女はいつたい誰だね？」

「あ、ええと、旅人らしいです。昨日知り合って……」

「ほお？ そんな暇があるのなら弟子の一人でも自力で見つけたらどうだね？」

今すぐ！ こいつの言っていることが分かるようになって文句を言えるだけの能力が！ あればいいのに！

（あげるー）

うん？

一瞬、目の焦点が合わなくなった。

なんだろ、今の

「そ、それは、」

「まあなんにせよ、詳しい話は戻ってからしようじゃないか。こんな所でいつまでも立っているわけにもいかない」

あ、れ？ 何を言っているのか解るようになった。え？ なんで？

（大陸言語だよ）

（話せるよー）

今の精霊さんの言葉が聞こえたのか、アーニヤは驚いたようにこちらを見ているがそれがさらにおっさんの癩に障ったらしい。

わかっているよ、アーニヤ。それは私に助けを求める視線ではなく、何もしないでくれという目だね。わかっているよ。おとなしくしてよ。しかしこのおっさん早く帰ってくれないかな。

「フラノワ君」

「わ、わたし、戻りません。……弟子は自分で探します」

震える声で、手のひらをきつく握りしめて、アーニヤははっきりと言った。

「フラノワ君、わかっているんだろう。今の君では無理だよ。せめて研究機関でなにがしかの成果を上げて名を知られるようになってから」

あのおじさん、なんでそんなにアーニヤに執着するの？

「それはもちろん、フラノワ君の才能が惜しいからだよ」
突然、おっさんは私の疑問に答えた。

アーニヤはぎよつとして私とおっさんを見比べている。

「教師になるだと？ バカバカしい。そんなことよりも世の中の為にもっと研究をするべきだ。フラノワ君なら、へりを超えることだつて」

人の夢を捕まえてバカバカしいってどういうことよ。教授がそんなに偉いつていうの？ 人の夢を笑うなんて、

「……いりません」

おっさんの言葉と私の思考を遮って、アーニヤの低い声が響いた。
精霊がアーニヤの声に従って、彼女の周りを取り囲む。

「名誉も結構です。そんなに研究がお大事なら差し上げます。その代わり、もう私に構わないでください」

「しかし、君は研究職に就くべきだ」

尚も言いつのる教授とやらに元上司が重なって見えて、むなくそわるい。

「それはあなたに考えていただくことはありません」

「へりだつて、君が教師になるなどと言ったら反対したんじゃないのかね？」

「師匠は私が教師になりたいと言ったら、がんばりなさいとおっしゃったんです」

「しかしだね、」

もう駄目だ。我慢できない。アーニヤには後で謝ろう。

「満足でしょう？ あなたに差し上げるとアーニヤは言ったの。何をしてたのか知らないけど、その研究とやらはあなたのものよ」

たぶん、もう、それ以上のものはあなたには作り出せないでしょうけど。

精霊さんが私にまとわりつく。不思議と不快感はない。

「もう、アーニヤに構わないで」

世界が、歪んだ。

「……はい」

おっさんはそう言うてくるりと踵を返すと、来た道に戻って行った。

え？ なに？ 帰ってくれた？ の？

アーニヤはその場にへたり込んでいます。どうしたんだろう。

「アーニヤ、大丈夫？」

「モトコ、あなた、ことば、いいえ、それよりも精霊術を……」

アーニヤは困惑したように私を見上げている。

（大陸言語、使いたいです）

（だからあげたのー）

（アーニヤに意地悪する人きらいー）

（僕もきらいー）

（だからもう、アーニヤのこと知らないよー）

（構わないよー？）

「結局どういうこと？」

精霊さんたちの話すことはいまいち要領を得ない。はっきりしているのは私が大陸言語を話せるようになって、あのおっさんが帰って行ったということだけだ。

アーニヤは彼らの言っていることが理解できたらしく、小さく頷いて立ちあがった。

「モトコ、あなたは精霊術を使ったのよ」

「精霊術？ 魔法とは違うの？」

「魔法、というのは魔術と精霊術を総称する言葉よ。最近はあるまじり使われないんだけど。ええと、それで、精霊術はさっきみたいに精霊さんが力を貸してくれる術のことよ。魔術は、精霊さんを使役する術」

「違いがよくわからない」

「精霊術は精霊さんと仲が良かったり、好かれていたりしないと使えないの。魔術は手順さえ踏めば誰でも精霊さんを使役できるのよ」

「……友達に手伝ってもらおうか、お金出して人を雇うかってこと？」
「そうね」

私の表現がおかしかったのか、アーニヤはくすくすと笑った。
「私が大陸言語をしゃべれるようになったことも、あのおっさ、教授が帰ったこともその精霊術のおかげってこと？」

なら、術が解けたら話せなくなってしまうのか。

「ええ。それと精霊術と魔術の違う所はいくつかあるんだけど、精霊術は術者が解くか精霊さんに嫌われるまで続くわ。対して魔術は術者が提供した魔力が尽きるまで続くの」

給料分の仕事しかしませんよってことか。なかなかドライで私は好きだな。

アーニヤは話しながら寝泊まりしていた小屋の方へと歩き出した。心なしか表情は明るい。

「アーニヤ、ごめんね」

「え？」

「出しゃばるつもりはなかったんだけど、どうしても我慢できなくて……、ごめんなさい」

「いえ、こちらこそありがとう。モトコがいなかったら私、きっと連れ戻されていたわ」

いい子だよー。

可愛くて綺麗でいい子で胸おつきくて天才魔術師で料理上手、嫁ぎ先には困らないだろうなあ。

あ、今嫌な奴の顔を思い出した。気持ち悪い。嫌だ、と思うと芋づる式にあいつの部屋の扉を開けたところから思い出してしまふ。

嫌だ、嫌だ。気持ち悪い。

「さっきのおっさんが私に気付いたのって、精霊さんたちが向かっていったから？」

頭の中の映像を振り払うように私はアーニヤに話しかけた。

「ええ。精霊さんの気配を感じることがするのは魔術師としての素質の一つよ」

「ふーん。でも、術って防げないの？ あの人もろに術にかかってたよね？」

「モトコが術を行使するような動きもなくて、その、若い見た目もあって油断したんだと思うわ」

油断大敵って本当なのねえ。

「今年も、ダメだったなあ……」

寂しそうに笑ってアーニヤはうなだれた。

母校で教鞭をと願うアーニヤに協力してあげたいとも思う。けれど、知り合いもない土地では弟子を探してあげるのは難しい。

私の方が誰かに面倒を見てもらわないと生活だってままならぬだろう。

ん、あ、そっか。

「私がアーニヤの弟子になればいいんじゃない？」

「え……？」

「二人でやれば早いと思うし、帰るためにも私が魔術をつかえたほうが何かと便利なんじゃない？」

「そ、う、かもしれないけど、……だめよ。モトコにそんなこと、私が巻き込んだのに」

そうは言うがアーニヤががんばってくれている間、私だけニート生活を送るわけにもいかない。

「それに、私が教師になりたい学校に入学したら4年間は学生として生活してもらわなくちゃいけないのよ？ モトコはそんなに待てるの？」

「待つてる人もいないしねえ」

両親も彼氏も友達もいない。一番仲の良かった友達は、元彼の浮気相手だ。やっつけられるか。

「ちようどどこかに旅行にでも行くこうかなって思ってたところだからいいのよ」

「4年も？」

「居ちや悪い？ 生活費くらいは自分で稼ぐわ」

「そういうことじゃなくて、早く帰りたいでしょ？ そんなことをしている場合じゃないわ」

「なら、アーニヤは4年後には確実に私を元の世界に帰せるっていうの？」

「それは、わからないけど……」

「何か、してきたいのよ。ただ待つてるだけなんて私は嫌なの」

不安になる。知らない土地で、言葉は通じるが頼りになる人もいない。常識もお金も住むところもない。いつ帰れるかもわからない。捨て犬だっってもう少しマシだ。

「モトコ……」

「お願いよ。もしも帰る方法が見つかったても、4年間は帰らないから。アーニヤが教師になれるまで協力するから」

「でも、」

「お願い、アーニヤ」

不安で、どうしようもない。しゃべっていないと泣いてしまいそうだ。

なんだって、こんなところで泣かなくちゃいけないのか。嫌だ。

泣くのは嫌だ。不安なのも嫌だ。

見知った世界に帰りたい。一人でも生きていける世界に帰りたい。でも、かえりたくない。

「……………わかったわ」

そうして、しばらく私とアーニヤは道の真ん中で立ち止まって見つめあっていた。折れたのはアーニヤだった。

「さっきの言葉にウソはないわね？」

「何があっても4年間、アーニヤの弟子としてがんばる」
帰れるように。帰りたいと思えるように。

「私も責任を持ってあなたを元の世界に帰せるように、努力するわ」
アーニヤは大きく息を吸って、精霊さんに呼びかけた。

「これから、師弟の契りを結びます」

(はい)

「手を出して」

差し出された手を握ると、アーニヤは泣きそうな顔で「本当に、いいのね？」と聞いてきた。

アーニヤは泣き虫ね。

妹がいたらこんなかんじなのかなと思いつながら私は笑って「もちろん」と言った。

「これからよろしく」

「こちらこそ、よろしく」

少しだけ、泣きそうだった。

1・3 いったって、誰かに頼って生きてきた（後書き）

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

1・4・猫にマタタビ、女郎に小判

風船から空気が抜けるような音がして、コップの中の金色の液体は泡立った。同時に周囲には草の匂いと何かが焦げた匂いが漂う。

焦げには発がん性物質がどのくらいの話、最近では聞かないよなあ。あれって何トンか摂取しないとそうはならないのかなとか聞いた気がうふふ。泣きそう。

「美味しくはないけど、ええと、その、がんばって！」

正直だな、オイ。

今私の目の前には、髪と目の色を変えろという飲み薬がコップになみなみと用意されている。

帰りの道中で『師弟の契り』とかいうお嫁さんごっこみたいなお話をした後、私たちは朝目を覚ました小屋に戻ってきていた。見た目をちょっと変色させたら面白い物に行こうというのだ。そのための薬をアーニヤが用意してくれたのだが、見た目は冒頭の通りである。アーニヤは自分の分だという黒い液体を飲み干して数分も経たないというのに、すでに瞳の色は金から赤へと変わっていた。金髪赤目がこの国の大多数だったわけ。

「……………」
金箔入りの飲み物だと思えば、いける、かな？ いや無理だな。

「さ、早く」

「……………」
ええい、女は度胸だ。

右手にコップを持ち、左手で鼻をつまんで、目を瞑って一気に流し込む。

「うええええええ」

舌がじんじんして鼻に抜ける匂いはどう考えても焦げた部分。これを10日に一度は飲めっていうのか。

口直しにと手渡された水を飲み干して、帰ってきた時と同じよう

に旅行用だというマントを羽織った。
ところで私、何色になるんだろう？

「私の行きたい学校は、ヴィアン国の首都ヴァーウエンにあるヴィアン魔法学校というの」

ざくざくと整備されていない道を町へと向かいながらアーニヤは今後の計画について話し始めた。

「ビアン。国の名前と同じなの？」

「ヴィアンよ。国の名前を冠しているその名の通り、国立なの。建国時代から続く由緒正しい名門校よ。相応の実力がないと入学できないけれど、卒業すれば国を問わずエリートの道が約束されているわ」

「進学校、なの？」

「世間一般的にはそうかもしれないわね」

聞いてない。進学校に入学するだなんて聞いてないよ？ アーニヤの母校だっていうから油断した……。いや、天才だって聞いたよ。うな気もする。うっ。

「国立なのに国を問わずエリートになれるの？ 他国は納得するの？」

「納得はしていないかもしれないけれど、この大陸で一番歴史のある学校だもの。信頼はされているわ。それにね、ヴィアン魔法学校が『才能の有る者には広く門戸を開くべし』という理念の元で運営されているから、私やモトコでも入学できるの。他の魔法学校はほとんどが家柄で入学を拒否するところばかりだから……」

恐らくその聖人君子のような理念は他の国のように身分で差別しないことで、より優秀な人間を自国の配下に置きたいというのが本音なんじゃないだろうか。エライ人の考える事なんて知らないけど。「家柄？ この世界は誰でも魔法が使えるのよね？」

「ええ。魔術師としての素養は血筋に寄るところが大きい。今の歴史の中で平民出身の大魔術師が存在しなかった訳ではないんだけど、ね」

言葉を濁して、アーニヤは腰から下げた棒のようなものに軽く触れた。

「ヴァーウエンまでは歩いて一季きうごくらいかかるから、町で準備を済ませたら明日か明後日には出発しましょう」

「一月もかかるの？」

「ええ。路銀を稼ぎながら移動するの。その間にモトコには魔術を学んでもらうわ」

進学校ってその程度勉強すれば入れるものだったっけ？ 高校時代、大学進学を決めた友達もつと勉強してた気がするんだけど、あれは気のせいだったのかなあ？

「大丈夫。精霊術が使えることは確かなんだし、あとは魔力の練り方と制御方さえ覚えればなんとかなるわ」

「まあ、アーニヤがそう言うならそれでいいけど……。ね、もしかして『お師匠様』とか呼んだほうが良いの？」

「からかい半分に問うとアーニヤは赤くなって勢い良く首と手を横に振った。」

「そ、そんなっ！ 今まで通り『アーニヤ』でいいわよ」

「二人のときはそれでいいかも知れないけど、一般的な師弟ってそういうものなの？」

「お弟子さんは自分の師に当たる人を『（お）師匠（様）』とかもしくは、その、例えば、だけど、『アーネツカ師』と呼ぶことは、あるけど……」

自分の名前を例にするのを照れているらしく、アーニヤはもごもごと教えてくれた。

先生を目指して行くせにその程度で照れるのか。可愛いなあ。

「私は他の魔術師のことはなんて呼べばいいの？」

「弟子のいないに問わず、魔術師は家名でお呼びするのが一

般的よ。私なら『フラノワ師』ね」

「他の先生のことともそう呼んだ方がいいのよね？」

「ええ、そうよ」

（あのねー、アーニヤはアーネツカ師って呼ばれたいんだよー）

（憧れなんだってー）

（でも恥ずかしいんだってー）

「だ、だめだめ！ 言っちゃだめー！ 聞いちゃだめー！」

へえ。さすが精霊さん、よく知ってる。ならば一番弟子としてその期待にお応えしましょう。

「それじゃ、早く行きましようかアーネツカ師？」

「も、もう、モトコつたら！」

金色に染まった自分の髪に違和感を感じながら、私は町へ足を踏み入れた。

町は昼時ということもあってか、それなりに賑わっていた。市場の立つ時間を過ぎているから、それでも人は少ない方らしいがそれでも夕方のスーパークらいの活気はあると思う。

行き交う人々は様々な格好で、アーニヤのようなワンピースや、Tシャツにパンツのようなラフな格好の人もいれば、腰から剣を下げた銀に光る鎧の男の人、エプロンをつけたままのおばさんや皮製のベストの少年もいた。殆どの人は金髪で、石畳とレンガ造りの町並みからは中世のヨーロッパのような印象を受ける。これじゃあ確かに私の黒髪は目立っただろうな。

お昼ごはんは朝も食べたナンっぽいものに、これまた野菜（水色だった）っぽいものとか肉（緑色だった）っぽいものを、クレープみたいに巻いた食べ物だった。サンドイッチに近い気がする。色はともかくうまい。

「どこで買い物するの？」

「ギルドの近くに、冒険者が要らなくなった物を売り買いしているお店があるの。そこで揃うはずよ」

ギルド？ 冒険者？ またなんかファンタジーな単語が出てきた

気がする。ええと、確かアレだろ？ ギルドって日雇い派遣幹旋所だろ？ 冒険者、はそこでお世話になってる人か。フリーターとか呼んだら怒られるのかな。やっぱり色々違うんだなあ。

木の扉を押し開けると皮や油、金属の匂いの入り混じった独特の匂いが漂ってきた。壁にはずらりと剣や鎧が飾られ、棚には靴や鞆、アクセサリーなんかが所狭しと並べられている。私たちの他にお客さんはいないようだった。

「いらっしやい」

「こんにちは。あの、この子の服を探しに来たんですけど」

「冒険者志望かい？」

「いえ、王都まで行くので丈夫な服が欲しくて」

「それなら、これなんかどうだい？」

店員さんとアーニヤがアーニーだこーだと選んでくれている間、私は物珍しさから店内をうろついていた。

とある棚に精霊さんたちが集まっている。不思議に思っただのぞいてみるとその棚の奥に無造作に置かれた白い毛玉が気になるようだ。手に取って見るとそれは巾着だった。外側に足の長い毛皮が使われているので毛玉に見えたのだ。袋を閉じる紐と裏地は晴れた空のような青色だった。

（きゃー）

（ふわふわー）

（もこもこー！）

（もふもふー！）

（わーい）

（さーらさらっなのー）

（すべすべー。すてきー）

巾着の周りをふるふると飛んだり、触ってみたり顔を近づめてみたりと、精霊さんたちは猫にマタタビ状態になっている。青い精霊さんと白い精霊さんが多いのは自分と同じ色だからかな。

（欲しいのー？）

(綺麗だもんねー)

お金ないし、ムリムリ。こういうのって高いんでしょう？ 欲しいのは否定しないけど。

「おや、お嬢さんそれが気に入ったのかい？」

「いえ、その、こういうお店って初めて入るので珍しくて。すみません」

早口で店員さんに謝って、商品を元の棚に戻した。アーニヤに呼ばれて店の奥へ入ると、そこは金属の匂いが濃い場所だった。

「武器はどうしたい？」

「ぶき」

銃刀法、とかないんだろ？ なあ。さつき道ですれ違った人も帯剣してたし。それにしても、そんなに物騒なのか。困った。

「何か手に馴染んでるものはあるかい？」

手に馴染んだもの……包丁とか？ ペンはダメだし、掃除機？

じゃなくてももうちょっとまともなもの……あ、あれはどうか

「バトン？」

言うと、アーニヤと店員さんは疑問符を浮かべた。

やっぱりこっちにはないのかな。そもそもスポーツ自体あるのか？

(魔術戦ならあるよー)

(剣術大会とか)

(馬術！)

うん、なさそうだな。

「うーんと、このくらいの長さで、このくらいの太さの真っ直ぐな棒があれば、それがいいです」

そう言いながら、腕と指で長さと太さを指定する。

「棒術にはちよっと短いし細いと思うが、いいのかい？」

「はい、構いません」

「材質はどうする？」

「軽いものでお願いします」

軽い分には何か巻いたりすれば重くできるし。

店員さんは首を傾げながら、奥のほうから木の棒を出してきて腕の長さで切ってくれた。

あとで両端に石でもくりつければおもりの代わりになるだろう。問題は私がバトンをやめてもう7年近く経ってるから上手く扱えるかということだ。ダメなら叩くのに使おう。そうしよう。

お金を払ってお店を出ると、今度は別のお店へと連れていかれた。「私はちよっとギルドに用事があるから、その間ここで待っていてもらえるかしら?」

「うん、わかった」

人ごみに消えるアーニヤを見送って、私は『貸本屋』と書かれた扉を押し開けた。薄暗い店の中は、本の密集地だった。人が一人どうにか通れるだけの通路の両側には私の背よりもはるかに背の高い本棚が並んでいる。

さて、何を読もうか。魔術、はアーニヤに教わるから、この世界の基本的な成り立ちとか歴史がいいかな。

「こんにちは、何かお探ですか?」

入り口で立ち止まっていたからか、店員さんが近寄ってきた。

「ええと、歴史とか精霊さんについての易しい本を探しているんですが、どのあたりにありますか?」

「そうですね、この辺りはいかがでしょう?」

店員さんはニッコリと笑って店の入口近くの低い段を教えてくださいました。背表紙には『ようせいさんといっしょ』『つよいぞヴィアンおう』などと書かれています。うん?

「文字を覚えたてのお客様はよくそちらを借りていかれますよ」

やっぱりそういう方向ですよー。識字率がどの程度なのかは知らないが、覚えたてだと思われたのか。内容的には合っているだけになんとも言えない。

「ありがとうございます」

「また何かありましたらお声をおかけください」

「はいー」

しばらくその辺りの本を見比べていると、アーニヤが戻ってきた。「お待たせ。いい本はあった？」

「うーん、これとか。……ほら、私って常識無いから、こういう誰でも知ってそうな話を読んだほうがいいかなって思ってる」

差し出した本のタイトルを見て首を傾げたアーニヤは私の説明に納得したように頷いた。

「それならそれがちょうどいいと思うわ。すみません、この本お願いします」

手続きを済ませてアーニヤに引きずられるように帰路についた。

小屋へ戻ってから買ってきた荷物を解くと、私がりサイクルショップで見っていた白と青の巾着が入っていた。目ざとい精霊さんたちがわっと寄ってくる。

(さらさらー)

(やーん、きもちー)

(すべすべー)

(きゃふー)

「アーニヤ、これ」

「それ、良い物見つけたわね、すごいわモトコ。ケンヌの毛皮とムーメイティ人の髪で作ったお守り袋がたったの500ガルなんて、そうそうないわよ!」

「え、なにそれ」

確かに綺麗だなんて思ってたけど。……今、髪って言った？まさかこの紐と裏地って、人の髪でできてるの？

「ケンヌは『風の御使い様』とも言われる動物で、ムーメイティは水の国よ。この2つの素材は『風』と『水』の代表的な術具なのじゅつぐ?」

(術を使うときに使う道具のことだよー)

肌触りを存分に堪能しながらの解説ありがとう。

「そういうのって高いんじゃないの?」

「もちろん本物は高いわ。でもこの素材は代表的なだけに模造品も

多くてね、これもそうだと思われてたみたい。得したわね。これはモトコのものよ」

「そんなにいいものならアーニヤが使いなよ」

「見つけたのはモトコだもの」

「でも、本を借りたり服を買ったりしてもらったから……お金かかったでしょう？ 稼げるようになったら返すから」

「気にしないで。いつか弟子ができたら使おうと思って貯めていたから大丈夫よ。そんなに贅沢もできないけど、これ位は贅沢に入らないわ」

嬉しそうにそう言われてしまうと、反論する気も失せた。

そんなに弟子ができて嬉しいのか。そうだよなあ。お金は後でどうにかして稼いで返そうと思ってたけど、受け取ってもらえなさそうだなあ。

明日にはここを発つというので借りてきた本を読んでいる間に晩御飯ができていた。ピンク色のシチューみたいな食べ物はやっぱ美味しかった。

ベッドが一つしか無いので二人揃って潜り込む。一人用のベッドは狭かったけれど身近に人の体温を感じられてなんだか嬉しかった。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

（おやすみー）

（おやすみ）

（おやすみなさいー）

アーニヤは良い匂いがした。こういう生活、なんて言うんだっけ。……ヒモ？

1・4 猫にマタタビ、女郎に小判（後書き）

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

1・5・練習百遍(前書き)

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。
今回はいつもに増して設定の説明ばかりです。すみません。

1・5・練習百遍

「モトコ！ 行つたわ！」

「おおつけええええいっ！」

目の前に現れた熊だか猪だかよくわからない緑色の動物の目のあたり
に全神経を集中させる。鋭い目つきは肉食獣のソレだが、ビビ
つてはいられない。今日の晩御飯がかかっているのだ。

「ね、む、れえっ！」

ここ数日でやつと作れるようになった魔力をまき散らすと、精霊
さんたちがそれに触れて目標へと飛んでいく。黒い月の精霊さんが
眉間のあたりにとび蹴りをくらわすと、本日のメインディッシュは
音を立てて後ろへ倒れた。

どうにかうまくできたようだ。やれやれと無意識のうちに握つて
いたらしい拳を解いて脱力すると、アーニヤが木の根をひらりと飛
び越えて駆け寄ってきた。

「すごいわモトコ、魔力を練る時間がうんと短くなってる！」

「でも、まだまき散らすことしかできないよ」

魔術は魔力を使って精霊さんを使役する術だからその魔力が精霊
さんに、それも使いたい術に適した系統の精霊さんにきちんと届か
ないと発動したとは言えないのだ。今回は対象を眠らせたかったの
だが、それができるのは月系統の精霊さんだ。そのため本来は月系
統の精霊さんだけが魔力を受け取るように仕向けなくてはいけない
のだが、そのあたりのコントロールがどうしてもうまくできないの
だ。今も、私の魔力を受け取った赤や金の精霊さんたちが倒れた熊
つぽいものをぺちぺちしている。

「それはモトコが呪文を省略するからよ。きちんと詠唱すればすぐ
に制御できるわ」

「いやよ、恥ずかしい」

教えてもらった呪文は「月の精霊に希^{こいねが}う。我が魔力を代償に彼^かの

ものを眠らせ給え」だった。精霊言語でこれを唱えると、月系統の精霊さんだけが魔力を受け取ってくれて効率良く術が発動するらしい。

らしい、というのはあまりの恥ずかしさに私が使用を断固拒否して一度も使っていないからだ。ちなみにアーニヤのアレンジが入っているので、これでも短い方だそうだ。

「でも入学試験のときは唱えなくちゃいけないんだから、練習しておかないと」

「わかつてるわよー」

呪文の詠唱も審査項目の一つのハズなのできちんと使えるようにならなくてはいけない。呪文だけは毎日アーニヤが使うのを聞いているために覚えてしまったが、極力使いたくない私はどうにか省略できないかと悩んでいる。だって恥ずかしいし。

ちなみに術を唱える前に魔力を受け取ってほしい精霊さんに「受け取ってね」とお願いするのは、弟子の教育にならないためアーネツカお師匠様に却下された。楽なのに。

「詠唱は魔力を練るのと制御するのを一度にできるから絶対にその方が上達が早いんだよ？」

口に出した方が五感に訴えることができるので集中力が増すのは確かだ。最初のうちは集中できなくて魔力を練ることにすら難しかったのだから、本当は口に出した方がいいのだろう。この世界の間なら誰でも普段から帯びているはずの魔力は異世界人である私には皆無だった。曰く、生命力でもあるらしいのだがさっぱりわからん。わからないなりにアーニヤの誘導にのればなんとかカスみたいなものが出るようになったのが六日前。時間はかかるものの一人で練られるようになったのが二日前。ついさっきの魔力だって、濡れた手を振ったときに水滴が周りに飛び散るのと変わらない程度だ。

「それにしても、今日は調子が良いじゃない。やっぱりそれのおかげ？」

「うん、朝これを回してたらなんか集中できた」

腰から下げたバトンもどきを指摘されて私は頷いた。

木の棒ではやはり軽すぎたので木の皮と石ころで重さを増したバトンもどきは最初こそうまく扱えなかったものの、数日練習したら体が思い出したらしくなるとか回せるようになった。綺麗に回せるだけで楽しかった頃を思い出して、柔軟でも初めてみようかなと血迷いながら、今朝も練習していたら一度だけ思い通りに回せたのだ。その時、なぜかアーニヤが魔力を練るときの雰囲気を感じ出したので、もしやと思ってバトンを回すように練習してみたら上手かったというわけだ。

普段から雑念が多いだけなのかもしれないが。

「早く他の術も使ってみたいなー」

私に使用が許されているのは目下、月系統の術だけだ。得意な術の系統は体に宿している色によって大きく左右される。私が持っている色は黒だけなので、その色である月系統の術から練習することになったのだ。薬で変色させても精霊さんには元の色がわかるらしい。

「もう、まずは得意なのからって言ったでしょ？」

「はい。そういえば、なんで他の色はだめなんだっけ？」

持っている色が得意なのはいい。基本的に精霊さんは自分と同じ色があると嬉しいらしく、その色を宿した人の魔力を受け取り易いのだ。

「魔力に色を込めるって、本当は難しいのよ。元々持っている色だったら術者が意識しなくても、魔力は使いたい術に適した色をしているわ。けど色は本来、見るものではなくて感じるものなの。普段『見えて』いるものを『感じる』というのは難しいのよ。どうしても目に見える色が、それを感じることを邪魔するわ。私やモトコは精霊さんと触れ合えるからその感覚が養われているけれど、それを掴むには精霊さんをより深く感じる事が不可欠よ。魔術師の素養として精霊さんの存在を感じる事ができなくてはいけないというのもこのためね」

その『見える』と『感じる』の関係性を言われるとそんなものかなとも思うが、元の世界で生活していた頃に当てはめてみるとこれだという具体例が思い浮かばない。第一印象が悪いとその後のその人への評価も低くなる、ということに近いのかもしれないが、なんだかしっくりこない。『感じる』という必要性がなかったからだろうか。

逆に視覚は思い込みや記憶によってゆがめられるという話を聞いたことがある。あれは確かテレビでそういう特集を見た時だったか。『こうだと思う』ことによって『見え方』が変わってしまうのだから。その時はエッシャーってすごいんだくらいにしか思わなかったけどもうちよつと真面目に聞いておけばよかったかなあ。

色の感じ方にしても、ダイニングの灯りは蛍光灯の白よりも白熱灯のオレンジの光の方が料理がおいしそうに見えるとか、青は集中力が上がるから会社の内装や備品には青系のものが多いとかその程度のことしか知らない。

常識が通用しない。置き換えられる現象も思いつかない。随分と遠いところへ来たものだ。

いつ匙を投げられるかとヒヤヒヤしていたものだが、どうやらアーニヤはやりがいを感じてくれているようだった。逆境に強いのは良いことだ。

アーニヤは先ほど私が眠らせた獲物に近寄って呪文を唱えている。金色をした日の精霊さんたちがその獲物の体に巻きついて、ごきりとその胸のあたりから生理的に恐怖を感じる音をさせた。急所を一撃で突いたのだ。最初はアーニヤの外見とのギャップに驚かされたが、今では慣れっこだ。

アーニヤが得意とする日系統の魔術はいわば物理系で、重い物を持ち上げたり今みたいに砕いたり折ったりすることができる。対して私が使う月系統は精神系で、対象を眠らせたり幻覚を見せて混乱させたりできる。

「さて、今日はこのくらいにしましょうか」

「はい」

太陽もだいぶ傾いてきた。今は月季、月の出る時間が一番長い季節。私が召喚されてから、十日が経っていた。

この世界の暦は系統の数である6を基準として成り立っている。1年は6つの季に分けられて、1季は6つの節に分けられて、1節は6つの中で分けられているので、 $6 \times 6 \times 6$ で1年間は216日あり、それぞれ風、日、火、地、月、水の順に巡るのだ。元の世界の暦で言うと季は月、節は週、中は曜日に近い。例えば今日は月季日節地中だから、明日は月季日節月中だし、6日後は月季火節地中という具合だ。一か月が全て同じ日数だと思えばいいのでこれはまだ違和感なく受け入れられた。しかし、更に1季に一度はその系統のお祭りの日があるとか、休日は季によって変動するとか、お祭りの前後の日は休みだとか、そういった細かい所はまだきちんと覚えていない。カレンダーかスケジュール帳が欲しいところだ。

ぼんやりと復習しながらアーニヤを手伝って今夜の野宿場所を確保する。私が最初に目覚めた小屋は、あの辺りの森がまだ未開拓だった頃に建てられたもので冒険者が自由に使える施設らしかった。そんな小屋がそうそう建っているわけではないので、最近はおつぱら野宿だ。

他の人間や獣が入ってこれないようにアーニヤが結界を張ってくれている間、私は地面に火をおこすための魔方陣を描く。結界や灯りなどの場所を固定して効果を長く持たせたい術には魔方陣が効率的だ。術の規模と期間に見合うだけの魔力さえ渡せば、精霊さんがその魔方陣の上でごろごろしたりで遊んだり踊ったりしながら術を発動してくれるのだ。見ていだけで和むので私は気に入っている。「描けたよー」

「はい。……うん、もうすっかり魔方陣は上手く描けるようになったわね」

魔方陣なら恥ずかしい詠唱をせずともその中に色々と注文をつければ、あとはきちんと魔力を練るだけで発動するから必死に覚えた

のよ。とは言えない。

「アーネツカ師の教え方がいいからよ」

「！も、もう……」

赤くなつて恥ずかしがるアーニヤはどうしてこんなにも可愛いのか。いつまでもこの呼び方に慣れないでいて欲しい。楽し、じゃなかつた可愛いから。

「火の精霊に希う。我が魔力を代償に此処へ火を灯し給え」

魔方阵の上に両手をかざして詠唱しながら、その手のひらに魔力を練る。それははらはらと花びらのように落ちて火の精霊さんたちに触れると、彼らは魔方阵の上に降り立つてくると踊り始めた。精霊さんの足元から、燃料も無いのに火がおこる。アーニヤの練る魔力はいつも綺麗だ。彼女は魔力を後から後から幾重にも生まれるように練る。大輪のバラのように、湧き水のように、繊細でキラキラしていて私はそれを見ているのがとても好きだった。

詠唱を終える頃には火が付いているのは経験の差か。あんなに綺麗で大量の魔力を一瞬で練るにはどれだけ経験を積めばいいのやら。「そうだわ、さつきキアの実を見つけたの。もしかしたらモトコが好きなんじゃないかなって思つて採つてきたんだけど……」

「キアの実？」

（酔っぱらいの実）

（さつきのシャグもキア好きだよ？）

この正体不明のメイソディッシュはシャグというのか。

「はい、飲んでみて？」

瓜のような形のピンク色の実にを半分に切つたのを丸ごと渡された。その切り口ににじむ汁をちよつとだけ吸つて口に含むと微かなアルコールが鼻に抜けた。あ、なんだろ、これちよつと懐かしい、この酸っぱさ、濁り、そう、これ、

「どぶろくっ?!」

ものすごい勢いで食いついてしまった。それにしてもうまい。実つてことはこれは植物？ 庭に植えたい。

「ふふ、やっぱりね。モトコ、お酒好きでしょう?」

「うん! ありがとう!」

久しぶりのお酒が疲れきった体に染みる。私たちは最初の町を発つてからずっと森の中を進んでいたため、最初の夜以来お酒を飲んでいなかった。木の実やお肉を現地調達しているので頻りに町へ立ち寄る必要もないのだ。洗濯やシャワーも魔術で行えるし、なにによりサバイバル生活は私の修行には持って来이었다。今では小動物程度なら捌ける自信もある。ただ、夜は冷えるようになってきたのでそろそろふかふかのお布団が恋しくもある。

「あと2、3日したら町へお帰りましょうか」

そんな私の心を知ってか知らずか、アーニヤが獲物を解体しながら言った。こういう大物の作業はまだまだ手伝い程度しかできない。

「ホント?」

「ええ。薬草とか毛皮とか、結構溜まってきたからそろそろ売ろうと思って」

アーニヤは効果のある薬草や倒した動物から剥いだ皮や牙を、私に用法なんかを教えてくれながら採取していた。それを売ろうというのだ。

「甘いものでも食べましょう?」

「やった!」

甘いものは果物ぐらいしか食べていなかったから、甘いものと聞いてテンションが上がる。この世界の食べ物は何れもおいしい。中でもアーニヤの作る料理は野外にも関わらず絶品だ。教わりながら作ることもあるのだが、知らない味ばかりでなかなかさじ加減が上手くないかない。

いつの間にか、夜空には丸い金色の月が浮かんでいた。

1・5・練習百遍(後書き)

今回の話で軽く説明したものは後の話で補足を入れていく予定です。
どうか悪しからずご了承ください。

1・6・日の都、ヴァーウェンへようこそ

右手首の周りを一回転、二回転、背後で左手に持ち替えて左手首の周りを一回転、二回転。

このバトンもどきもだいぶくたびれてきた。

「うーん、まだスムーズにはいかないなあ」

「そんなことないわ、とつても上手よ」

「バトンの話じゃないわよ？」

「魔力もバトンも、両方よ」

少し離れた所で自分のことのようにうれしそうに笑うアーニヤの足元には私が一人で仕留めた鳥（と植物をかけ合わせたような動物）が三羽ほど横たわっている。

ここはもう王都ヴァーウェンにほど近い街道だ。今までの山道とは異なりそれなりに整備されていて空間が十分取れるしあまり人も通らないので私も気兼ねなくバトンを振り回している。

鳥の足を紐で繋いで背負うと、私たちは街へと歩き出した。

今日は水季風節水中、辺りはすっかり寒くなっていた。

まだ朝も早いというのに、市場は活気に溢れていた。

「クスンが5つで800ガルだ！ 安いよ！」

「朝ごはんにかイヤの実はいかが？」

「フォインから届いたばかりのアルバだよ！」

アーニヤは人と人の間をすり抜けるようにして進んでいく。一方、こんな人ごみに慣れていない私は人に溺れながら進む。近所の夏祭りだつてこんなに人はいないぞ。ちくしょう。

「あ、アーニヤ、ちょっと、待って、」

「まずい、はぐれる。」

精霊さんに頼もうにも、こんなに人がいては他の人の思いと混ざってしまふのか、聞こえないらしい。

「アーニヤ」

まずいまずいまずいまずい。焦る間にアーニヤの姿は見えなくなってしまう。24歳の迷子とか洒落にならない。

立ち止まるわけにもいかないが、きつとすぐにアーニヤが気づいて戻ってきてくれるだろうからこの辺りから離れるわけにもいかない。人の流れから外れて狭い路地へ逃れる。背伸びをして見回してみても、アーニヤに気がついてもらえるだろうか。この世界の人は私からすると大きい。170近くあるアーニヤだって女性としては平均身長くらいだ。

（起きてよー）

「うん？」

声のした背後を振り返ると、薄暗い路地の先に藁を積んだ荷台が見えた。先ほどの声はそこに集まっている精霊さんのものようだ。なんだろう。

（ねー、起きてー？）

（遊ぼうよー）

どうしたの？

ここから離れるわけにもいかないのだから心の中で強く呼びかけると、数人がふよふよと寄ってきた。

（シユラが起きないの）

（のー）

（モトコ、起こしてー）

シユラ？ その藁の中に誰がいるの？

（早く起きないと売られちゃうの）

（シユラ売られちゃう）

（でも起きないの）

（起こしたげて）

（おきなーい）

うえ、人身売買か。できれば関わりたくないなあ。

(見張りはいないのー)

(いるけどいなーい)

(こーしょーちゅーだよー)

(なにになー)

(お買い得なんだって)

(でもでも難航ちゅー)

そう、逃げるなら今ってわけか。市場を歩く人は精霊さんの声にも私にも気づかない。……ああ、もー。そういうのはガラじゃないんだけど、しょうがないな。ここまで聞いたら引き返せない。

人が来たら教えてね！

(わかったー)

(やるやるー)

あれ、なんかいつのまにか精霊さん増えてないか？ まあいいや。フードを深く被って、足早に荷台に近づいた。なるべく目立たないように中腰になって藁をかき分けると、端正な顔立ちの40代前半くらいのおじ様の顔が現れた。水色の短髪に傷一つ無い滑らかで陶器のような青白い肌、深くはない皺が渋い印象を抱かせる。やだ、イケメン。じゃなくて。この人がシュラさんね。

(そうなの)

(起きないのー)

うん？ なにこれ？

シュラさんのすぐ側に丸くなって眠っている月の精霊さんがいるのだが、おかしなことにその額には糸のようなものが付いていて、二人の額はその糸で繋がっているのだ。これ、魔力の糸よね？

(モトコー)

(来るよー)

(きちやうよー)

まずい。ええい、魔力の糸なら魔力で切れるだろ。

えい。と指先に込めた魔力で二人の糸を絶ち切って、急いで元の

場所へ戻った。

「モトコ！」

「アーニヤ！」

「よ、よかった〜！ 突然いなくなるから私、わたしっ」

半泣きのアーニヤに抱きしめられながら、私は後ろから聞こえた木の軋む音が気になっていた。ここから早く離れなくちゃ。

「ごめんね、早く行こう？」

今度のはぐれないようにと手を差し出すと、アーニヤは嬉しそうに手を繋いでくれた。

心配かけてごめんね。

「ええ」

去り際にちらりと路地の奥を見ると、壁に手をつけてしゃがみ込みながらもこちらを見ている壮年と目が合った。灰色の瞳を見なかつたことにしてアーニヤにもう一度ごめんねと謝った。

良かった、大丈夫だったみたいだ。あとはまあ本人がなんとかするだろう。無責任でごめん。他の荷物に紛れさせて運んできたってことは、この世界で人身売買は悪いことなんだろう。もうこれ以上は関わりたくない。アーニヤに迷惑をかけるわけにもいかないし。

市場と住宅街を抜けた街の外れに、その木造の家はひっそりと建っていた。なかなか荒れていて長いこと人の手が入っていないのがわかる。蔦が絡まった外見はお化けか魔女でも住んでいそうだ。

お前たちがそうだろうとでも言うように頭上で鳥がぎゃあと鳴いた。

「着いたわ」

「ここ、がそうなの？」

「ええ、小さいけれど二人で住むには十分よ。さ、入って」

アーニヤが扉を開けると、意外にも中の空気は澄んでいた。私の驚いた顔に気づいたアーニヤが笑った。

「すごいでしょう？ これ、へりお師匠様のオリジナルの術なの。

扉の取っ手に魔方陣が組み込んであって、そこに魔力を注げば掃除いらずなのよ」

それは一体どういう仕組みなのかもすごく気になる。さすが、アーニヤが尊敬してやまない大魔術師、ヘリオ師匠様だ。彼はアーニヤのお師匠様で、この家の元持ち主でもある。今の持ち主は勿論アーニヤだ。

「部屋、どこを使えばいいの？」

「こつちよ。私のお下がりで悪いんだけど」

「アーネツカ師の弟子なんですから、いいんですよ」

「そう、ね。さ、ここよ」

玄関ホールを出てすぐ左の廊下の左手のドアが私の部屋らしかった。アーニヤの部屋は廊下を挟んで向かい側だ。

「わあ、広い！ それに、街がよく見えるのね」

「ええ、水時間は街の灯りがとつても綺麗に見えるの。さ、荷物を整理したらお茶にしましょう」

「うん」

荷物の整理と言っても大したことはない。マントと鞆とバトンをベッドの上、空っぽのクローゼットに服を詰めたらおしまいだ。

玄関を入ってすぐ正面には客室、右の廊下を進むと台所やお風呂があった。ダイニングキッチンにはすでにアーニヤがいて買ってきた食材や食器を片付けていた。

「もう終わったの？」

「アーニヤこそ」

「私は荷物が少ないから……はい、熱いから気をつけてね」

「ありがとう」

アーニヤの向かいの席に腰を下ろしてすっかり見慣れた赤いお茶を一口すすると、体の中がじんわりと温まった。

机の上には金色の紐で止められた紙束が2つ転がっている。

「これなに？」

「学校からのお手紙と、……兄弟子様からの、お手紙よ」

アーニヤが道中、町へ立ち寄るたびに学校へ手紙を出してなるべく早く試験を受けられるように手配していたのは知っていたが、も

う一通は何の用かわからない。けれども『兄弟子』その言葉にピンと来た。顔がにやけるのをカップで隠して私は聞いた。

「へえ、そういえば兄弟子様ってどんな方なの？ この国の貴族で、偉い騎士様なんだよね？ この街にいたりするの？」

「え、ええ、そう、そうよ。この街にご家族でお住まいなの」

みるみるうちに真っ赤になってアーニヤはちらちらと手紙を見ている。今すぐ開けたいんだろうなあ。開ければいいのに。

「じゃあどこかでお会いするかもしれないわね。なんてお名前だったかしら？」

「トルイツシュ・マグダナル様と言うの。とても、その、ええと、すてきな、かた、よ？」

(トリスー?)

(やさしいよー?)

「ええ、そうよ。やさしいかた、だわ」

カップを持つ両手は微かに震え、水面にはさざなみが立っている。実に楽しい。じゃなかった、可愛い。

見ての通り、アーニヤは兄弟子であるトルイツシュ様のことが好きだ。最初に兄弟子の話を聞いた時もこの調子で大したことは聞けなかったが、同じ街にいるのならぜひこの目でどんな男か確かめなければ。私の目の黒いうちはどこの馬の骨ともわからない男にアーニヤはやらん。

(やらーん)

(うまのほねー)

まあ、精霊さんからの評価は軒並み良いから心配はしていないが、友達が知らない男に取られるのはなんとなく寂しいじゃないか。

「そ、それより、大事な話があるの！」

「うん？ なに？」

「あ、あのね、その、今まで薬で変えてた髪と目の色のことなんだけど……」

「うん？」

そう言う今もアーニヤの目は赤だし、私の髪は金色で目は赤だ。

「その、入学するには元の色を申告してその色で過ごさなくちゃいけないの。それでね、その」

「え、ほんと?! やった!」

「え?」

あのまっずい薬をもう飲まなくていいとか嬉しすぎる。

「でも、意地悪されたり、悪口を言われたり、もしかしたら酷い目に遭うかもしれないのよ?」

それは、今までそういう目に遭ってきたということなのか。考えてみれば、進学校に一色しか持たない人間が入ったなんて、他の人からすれば面白いはずもない。

「でも、元の色でないと入学できないんじゃないの?」

「そう、そうなの。だから、その、……やっぱり止めても、いい、のよ?」

「アーニヤ?」

手を伸ばして、向かいでうつむいているアーニヤの顔を無理やり上げさせる。

「とつても、嫌な目にあう、のよ……?」

瞳いっぱい涙を溜めるアーニヤの頬に手を添えて、親指でそつと涙を拭った。

まったく、アーニヤったらすぐ泣くんだから。

「ちよつと、バカにしないでくれる?」

「うえ?」

「アーニヤは13歳のときに入学して16歳で卒業するまでそれに耐えたんでしよう?」

他の人が皆15歳で入学するところを、アーニヤは最年少で入学したと聞いた。それならば風当たりも殊の外強かつただろう。

「なら、24歳の私がただか18のクソガキ共の可愛いいたずらに耐えられないはずがないじゃない」

勢い余ってこちらが可愛がることはあるかもしれないが。

「それともアーニヤは私がおの程度で音を上げると本気で思っているの？」

「うう、ううん。……モトコは、モトコは、大丈夫」

「当たり前でしょ」

正直、ちよつと怖い。でもきつと、大丈夫。大丈夫だと思つてれば大丈夫。だつて、アーニヤがいるもの。

「お師匠様がしてくださつたみたいに、モトコのこと守れるように私がんばる！」

「それは特に期待してない」

「えつ、ええつ！」

「アーニヤはアーニヤなりにがんばればいいのよ。ね？」

アーニヤが先生になれるようにがんばつてたら、私もきつとがんばれるから。

「モトコ……」

「あーもう、また泣く。そんなに泣いてると、私が先に手紙開けちゃうからね！」

言いながら目の前で封を解く。

「へっ？！ あ、だ、だめー！」

「えーと？ アーネットカ・フラノワ師、ならびに一番弟子モトコ・ウルシバラ殿、教員試験日を水曜日節火中に決定致しましたので、当日の火時間までに本校へお越しくださいますようお知らせ申し上げます。だつてさ」

「え、あ、ああ、ええ、そつちね。うん、えと、三日後ね」

結構急だな。もう少しのんびり出来るかとも思つてたんだけどなあ。一年が終わる季と、学校の一年が終わる季が同じく今季だそうだから、仕方ないのかな。元の世界だと12月に卒業式、1月に入学式があるつてことか。うーん、それは忙しそうだ。

「なあに？ 兄弟子様からのお手紙開けちゃダメだったの？」

「そ、そんなこと、ないけど、でも、その、」

「冗談よ。なにか大事な用事だと相手に迷惑がかかるし、早く読ん

だら？」

「え、ええ……」

アーニヤは恐る恐る手紙に手を伸ばして神妙な手つきでそれを開いた。

一行読む毎に赤くなったり笑ったり困ったりと、恋する乙女は見ているとても可愛らしい。これについては精霊さんたちも同意見らしく先ほどからくすくすと笑っている。

（おてがみ？ おてがみ？）

（トリスから！）

（うふふ）

（しーっ！ 静かにー！）

（読んだ？ まだ？）

その光景を眺めながら、私は部屋のシーツとか新しい服とかいつ買に行けるかなあなんて考えて、お茶をすすった。

1・6 日の都、ヴァーウェンへようこそ（後書き）

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

1・7・きつと私たち両思い(前書き)

アクセス、お気に入り登録。ありがとうございます。
ガールズラブではありません。友情です。

1・7・きつと私たち両思い

正門越しに見える校舎は予想よりも小さかった。来る途中でお城を見たからだろうか。それにしたって私に通っていた普通科の高校に比べてもずいぶん小さい。進学校だというからなんとなく高校をイメージしていたが、中学校程度の大きさだろうか。

「1学年に何人くらいいるの？」

「ええと、私がいた頃は30人くらいだったかしら」

過疎の進んだ地元の小学校が1学年あたりそれくらいの人数だった気がする。

「少数精鋭なのね……？」

「年によつてまちまちよ。実力があればいいんですもの。多い年は60人くらいいたこともあるって聞いたわ」

そんなに違つと教室の確保が大変なんじゃないかなあ。それにしてもさつきから視線がウザい。

私たち金と黒一色の師弟は平日の登校風景の中で明らかに目立っていた。アーニヤの顔色は家を出た時と比べるとだいぶ悪い。そんな視線よりも馬（？）車や馬（？）で登校している生徒が存在することのほうが面白すぎる私は笑いをこらえるのに必死だ。

あ、白馬（？）！ 白馬（？）に乗つた王子様に追い越された！

「っ、ふふっ」

「モトコ？ 大丈夫？」

「だ、だいじょぶだいじょうぶふっ」

笑つてはいけないと思えば思うほど笑いが込み上げてくるのはなんでなんだろう。

アーニヤに見当違いな心配をされながら正門をくぐると、好奇の視線がいつそう強くなった。そこかしこでヒソヒソと話す声も聞こえる。名門校も案外お行儀が悪いのね。良かった、これなら私みたいな常識知らずでもやっていけそう。

背筋を伸ばしてぐるりと見回してやると、殆どの生徒は目を背け、そそくさと立ち去って行った。制服っぽい色とりどりのローブ以外は自由らしく、その下からはフリルや皮が覗いている。足元はタイツや生足、スラックスと多岐にわたっていた。スカートめくりならぬローブめくりとか、したらだめかな。

「で、どこに行けばいいの？」

「あ、えっと……」

「フラノワ師とウルシバラ殿ですね？ お待ちしておりました」

いつからそこにいたのか、緑色の制服のフードを目深にかぶった私と同じくらいの背の高さの少年が声をかけてきた。

「どうぞ、こちらへ」

案内されるままに私たちは校舎の奥へと進む。やがて人気のない廊下の小さな部屋に通された。そこは椅子が2脚とテーブルが一つ、そしてテーブルの上には紙とペンが置いてあるだけの部屋だった。

「こちらの書類に記入をお願いいたします」

書類には名前や髪と目の色なんかを書くようになっていた。言われたとおり書き進めて誕生日、の項目で筆を止める。10月20日、とは書けずにアーニヤの書類を盗み見ると、『日季日節日中』と書かれていた。金髪金目のアーニヤは誕生日も日系統なのか。ちよつと迷って『月季月節月中』と書き込んだ。見ていた精霊さんに笑われた。これでいいんですー。

先に書き終えたアーニヤは少年に案内されて部屋を出ていった。待機を言い渡されたのでとりあえず書類に間違いがないか見直す。

ドアのノックって2回だとトイレ、3回だと恋人とか家族を連想するとかいうけど実際どうなんだろ。

「お待たせしました。ご案内致します」

「はい」

笑顔で返事をして立ち上がる。常識が通用しないのなら私にできることはただひとつ、誠意を見せるくらいだろう。

背筋を伸ばして胸を張って顎を引いてお腹から声を、でも肩の力

は抜いて。目の前にいるのは愛しい人だと思って、笑顔を。ああ、でも、誰を？

「こちらです。どうぞ」

そう言っって少年はドアを開けてくれた。ちくしょう。人の心配返せ。

「ありがとうございます」

アーニヤ。

そうね、彼女が一番ふさわしい。がんばろうね、アーニヤ。

入る前の一呼吸、アーニヤを思い浮かべて、

「失礼します」

私は一歩、踏み出した。

「素子・漆原です。よろしくお願いします」

「どうぞおかけになって」

「はい」

広めの部屋には恰幅の良いおばあちゃんが一人で私の書類を手に微笑んでいた。あれ？ いつの間に受け取ったんだろう。さっき少年に渡したはずなのに。

白髪の混じった茶色の髪は肩口でカールしていて、おばあちゃんが話すとふわふわとゆれる。優しそうな笑顔が心を和ませるがこいつは油断ならん。年の功っつてのは手強いんだから。

「私はこの学校の校長をしているクルラ・バルゲンです。よろしくね。それじゃあ早速」

「では、これで実技と筆記は終わりです。お疲れ様」

「ありがとうございます」

内容はアーニヤと修行した内容の総復習みたいなものだった。あの呪文ももちろん詠唱した。

「最後に質問するわね。確認したいなものだから楽にしてちょうだい」

「はい」

「はい」

おそらくはここからが勝負。

「まず、あなたの出身地だけど『ニホン』というのはどのあたりにあるのかしら？」

はいきたー。一瞬、郷里が頭をよぎる。大丈夫、大丈夫。まばたき一つで鉄壁の営業スマイルを用意しろ。働いた四年間は無駄じゃなかったはずだ。

「この大陸上ではありません。遠い海に浮かぶ、小さな島国です」
嘘はついていない。

「そんなに遠いところからわざわざフラノワ師の弟子になるために出てきたの？」

「はい。一色の魔術師がいると聞いたものですから」

この辺りはアーニヤと打ち合わせである。私は魔術師になるために師事する人を探していて、同じ一色のアーニヤに弟子入りしたという筋書きだ。

「それだけの理由で弟子入りしたの？」

そう問いかけて思いついたのは泣きそうなアーニヤの顔だった。

「……最初は、利害の一致でした」

理解出来ないことが突然起こって、どうすればいいのかわからなくて、あの時の私は何かに縋らなくちゃ立っていることすら出来なかったと思う。アーニヤもそうだった。だから丁度良かったんだ。

「今は、アーネツカ師が尊敬できる人だから、私も弟子として認められたいと思っています」

恥ずかしがり屋で泣き虫で料理が上手で可愛くて心配性で言いたいことがはっきり言えなくて、一生懸命夢を追いかけてる彼女のことが、好きだから。とつても綺麗で優しい、私の大事なお師匠様。

帰るのは、アーニヤが先生になるのを見届けてからでいい。そう誓った言葉が嘘じゃないと思えるくらいには、あなたの弟子でいられて私は幸せよ。

「ふふ、そう」

「はい」

「あなたたち、そっくりね」

柔らかく校長先生が微笑むと、右側の壁が掻き消えた。壁があった床には細長い魔方陣が描かれていて、それを挟んだ反対側の部屋にはアーニヤが私と同じように椅子に腰掛けていた。

「二人共合格よ、おめでとう」

「ありがとうございます」

椅子から立って一礼する。右側でアーニヤが同じように立ち上がる気配を感じた。

校長先生と案内の少年に見送られて部屋を出た。人気のない廊下を戻って、正門を出て、ずっと無言のまま私たちは朝来た道を引き返していた。

「……………」

「アーニヤ」

「う、うん」

「そんなに泣いたら、干からびちゃうよ?」

「う、んっ」

ハンカチを渡すと更にぼろぼろと涙を零す。しょうがないなあ。

合格を言い渡されてからアーニヤはずっと泣いていた。

「休憩していく?」

「うん、うん」

ちょうど道の先には円形の広場が見える。露店もあるみたいだから何か温かい飲み物でも飲んだらちよつとは落ち着くんじやないだらうか。そろそろお腹も空いたことだし。

服の裾を引かれて振り返ると、アーニヤは泣きながら笑っていた。

「あ、あのね、モトコ、あの、」

「うん?」

「あ、りがとっ」

「こちらこそ、ありがとうございます。」

口にだすのがなんとなく恥ずかしくて、私は首を横に振ってアー

ニヤの手を引いた。

「ふう」

スコーンみたいなものを食べて、温かくて甘い飲み物を飲んでや
つと落ち着いたらしい。コーヒーとチョコを合わせたような味の飲
み物は寒いからか格別においしかった。

「今日はこの後どうするの？」

「ええと、そうね、入学するのに必要な物を買に行きましようか。
年越しの買い物もしたいし」

年越しかあ。蕎麦とか餅とかないよなあ。

帰り際にもらった書類を確認するとローブやノートを用意するよ
うにと書かれていた。入学まであと一季あるが早めに準備するにこ
したことはない。

「帰ったら兄弟子様にご報告のお手紙も書かなくちゃね」

「！ そそっそうね」

この間の手紙でも、可否を報告するようにと言われたらしいから
本当は早く帰りたいのかもしれない。

「そっいえば、私って兄弟子様にご挨拶しなくていいの？」

「新年会にいらっしやるそうだからその時にご挨拶すればいいと思
うわ」

「新年会？」

「年が明けたら王族の方々が主催される新年会があるの。ヴィアン
魔術学校は国立校だから教職員も招待されるのよ。もちろん弟子を
連れていってもいいの」

言いながら書類の中から招待状を取り出した。日付は風季風節風
中、つまり元旦だ。

新年会ということは忘年会もあるんだろうか。新人は一発芸を強
要されたりとか、いやいやそうじゃなくて。

「そっか、兄弟子様は貴族だから招待されてるんだ？」

「ええ、そっよ」

「ふーん。……ねえ、これってさ、ドレスコードとか、あるの？」
「え、ええ、制服のローブであれば問題はないはずよ」

「おお、ここでも制服は万能なのか。私だったら色は黒になるのかな。」

「アーニヤは？」

「え？」

「アーニヤは何を着ていくの？」

「私も教員用の制服があるから……」

ちえっ、つまらん。

「あと、マナーもよくわからないんだけど」

「普通にお行儀よくしていれば大丈夫よ」

「変な所で心配性ね、とアーニヤは笑った。あ、よかった、笑ってくれた。」

「確かこの近くに制服を扱っているお店があったはずだからまずはそこから行きましょうか」

「うん。ギルドにも行こうね」

「わかってるわよ」

お金を稼ぎたいから私もギルドで冒険者として登録をしたかったのだが、お師匠様権限で学校に合格するまでは禁止されていたのだが、卒業するまでは危険な依頼を一人で受けてはいけないという制約付きだ。

広場からは放射状に広い道が何本か伸びていて、そのうちの一本に入って少し進むと目的の店があった。ドアには『ヴィアン校制服取り扱い許可店』の文字がある。

「いらっしやいませ」

「こんにちは。生徒用と教員用の制服の採寸をお願いします」

「はい。ヴィアン校ですね？ ご入学おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

店員さんに連れられて店の奥の試着室に入る。

「では、失礼します」

「はい、お願いします」

「丈や色など何かご希望はございますか？」

「いえ、特には……あ、ちょっとお聞きしたいことがあるんですけど」

「はい、なんででしょう？」

「髪って、どこで買い取ってもらえますか？」

最初にアーニヤに買ってもらった巾着には人毛が使われていた。ということは人毛は売れるのだ。冒険者になることが許されたとはいえ、どの程度稼げるかは定かではない。弟子だからといっていつまでもアーニヤになんでも買ってもらうわけにはいかないのだ。

「髪、ですか？ 当店でも一応買取はさせていただいておりますが、制服を扱っている以上、ある程度は学校と関係のあるしつかりした店ということだろう。あんまり変な店で売るよりは、多少安く買われてもこういう店の方がいいのかもしれない。」

「じゃあ、お願いします」

「かしこまりました」

「遅かったわね、モト、」……？

「ごめんごめん」

「どうしたのモトコ、その髪」

「うん？ 似合わない？」

アーニヤはぽかんと口を開けて私の頭を見ている。

自分ではショートの方が似合うかなと思ってたんだけど、やっぱりちょっと切りすぎたかな。

「いえ、モトコの印象によく合ってる、けどそうじゃなくて！ なんだ……」

「お小遣い稼ぎに。すぐ伸びるから大丈夫よ」

断じて私がエロいからではない。

泣きそうな顔で黙りこむアーニヤを笑って促して店の外へ出る。

「じゃあ次はギルドね。どこにあるの？」

「あ、えつと、あつち……」

ああ、もう。そんな顔しないでよ。

「私ね、自分にはこのくらい短い方が似合うと思ってたの」

首がスースーする。さすがにちよつと寒いなあ。

「元彼が長い髪が好きだって言うから、伸ばしてただけなの」

「お付き合っている人がいたの？」

「うん。でもさ、ちよつとこの世界に来た前日に別れてたの」

一方的だったけれど、新しい彼女が慰めてくれるだろう。

「だから、ちよつとこう、ケジメというか、まあ気分転換みたいなものよ。伸ばしたままにしとくのもなんか癪だし」

2年弱付き合ってたけど今ではもう、好きだったのかどうかもよくわからない。

「モトコ」

両手を掴まれた。顔が近い。なんだ、どうした。

「今日は、飲みましょう」

「うん？」

これはあれだな。私が傷心だと思ってるな。

アーニヤは私の手をぐいぐいと引っ張って歩いて行く。さて、なんと云ったものか。

「ギルドに行つて、買い物を買ませたら、今日は晩御飯においしい物食べて、お酒でも飲みましょう」

「……うん、そうだね」

まあ、いつか。

1・8・お酒は二十歳になってから

視線が痛い。おかしいな、私ってこんなに繊細だったっけ。

女の子特有のひそひそ話のトーンは、私が露店で足をとめるたびに大きくなる。そんなに一色が珍しいのだろうか。

今日はアーニヤが学校に呼ばれているので私は一人で街にお使いに来ていた。ついでにちよつと露店をひやかしてやろうと思ったのだが、ほんの数メートル歩いただけで女の子たちの視線という名の集中砲火に早くも帰りたくなっているのが現実だ。

(モトコ?)

(モトコ?)

大丈夫だよ、ありがとう。

ささくれだった気持ちを精霊さんに慰められた。いかんいかん。

こんなんじゃないかん。大丈夫、この程度なんでもない。私はアーニヤの弟子だもの胸を張らなくちゃ。

二人分のローブが入った包みを持ち直して、こちらを見ている女の子の視線にたった今気づいたふりをして首を傾げてみせた。「何か言いたいことがあるなら面と向かって口で言えば?」という意味だ。

きゃ、とかなんとか言っつて少女たちは去って行った。

(きゃー)

ふんだ。早くお使いを済ませて帰ろう。

「こんにちは」

「はい、いらっしやい」

酒屋兼酒場である店内にはまだ時間が早いからか客の姿は無い。

決してやさぐれて一人で飲みに来たわけではなく、晩酌用のお酒が無くなってしまったので買いに来たのだ。

店主のおじさんの前に大きめのビンを出した。お店にこのビンを

持って行ってお金を払えば、入っていたお酒と同じ物を入れてくれるシステムなのだ。ちなみに瓶底にはアーニヤの魔方陣が描かれているので中身が入っていてもいなくてもとても軽い。

「これにお願いします」

「はいよ。……おお、誰かと思ったらお嬢ちゃん、アーニヤちゃんのお弟子さんか！」

「はい、モトコです」

「そうそう、モトコちゃん。髪短いからわかんなかったよ」

この店には街に着いて何日もしない内にアーニヤと一緒に挨拶に来ていた。なんでも、ヘリオ師匠様の代からの馴染みの店だそうだ。「それにしても懐かしいねえ。アーニヤちゃんもよく、ヘリオさんのお使いで来てたよ」

「そうなんですか？」

話しながらおじさんは手際よくお酒をビンに詰めている。

アーニヤの小さい頃かあ。きつと可愛かったんだらうなあ。

アーニヤが弟子だった頃の話の話を聞こうとしたとき、扉が開いてお客さんが入ってきた。

「いらっしやい」

「キア酒を」

そう言っただけカウンターに腰掛けたその男の人は一瞬鋭い目付きで私を見た。

その灰色の瞳にデジャヴを覚えて、はて？ と首を傾げた。こんな悪人面の知り合いいたっけ？

(シユラ！)

うん？ ああ、そっか！ この間寝てて売られそうになってたおじ様……やば。どうしよう。えーと、うん。ここは初対面を装うことにしようそうしよう。きつと向こうだって触れられたくないはずだ。そうだ。

「はい、お待ち」

たぶん、とシユラさんの目の前に出されたジヨッキの中身が音を

立てた。あれって、この間のどぶろくの实のお酒？

「モトコちゃん、キア酒が気になるのかい？」

おじさんの言葉に、シユラさんがこつちを向いた。ぎゃー。

「いえ、そういうわけではないんです」

「味見してくかい？ アーニヤちゃんには黙っておくからさ」

笑いながらおじさんは小さいコップにキア酒を入れて出してくれた。出していたいたものは飲まねばなるまい。

「わ、いいんですか？ すみません、ありがとうございます」

顔がにやけるのを自覚しながらコップに口をつけた。

くう。うまい。実から直接飲んだ時よりも雑味が少ないと言うか、

これ、日本酒に近くないか？

「お嬢さん、キア系のお酒が好きなんですか？」

「え？ ええ、そうなんです」

無視するわけにもいかず、笑顔で答える。

正面からちゃんと見てもやっぱりシユラさんは悪人面だった。美形であることは確かなのだが、凄みがあるというか、オールバックにしてサングラスかけてスーツを着たらやのつくご職業にしか見えないんじゃないかなろうか。

「あの、こういう味のお酒って他にはないんですか？」

何か聞かれる前に店主のおじさんに話題をふる。日本酒が飲みた
いだけともいう。

「うーん、キア系はあんまり出ないから、うちもそれしか置いてないんだ。すまないね」

「そうですか……」

「それなら、いい商人を知ってますよ」

私たちがシユラさんを見ると、彼はにやりと笑った。ひい。絶対カタギじゃないよこの人。

「ちょうど私が泊まっている部屋の隣にキア酒を売りに地の国から
ヴィアンまで来ている男が泊まっているんです。よろしければ彼の
所までご案内しますよ」

地の国はキア酒の名産地だ。ということは本場の味が楽しめるわけである。

「いえ、お師匠様に『知らない人に付いて行っただけじゃありません』と言われているので……すみません」

そうでなくとも遠慮したい。

店主のおじさんは「ふられちまったなあ」なんて言っただけで笑っている。

「ははっ！ この人、顔は怖いけど悪い人じゃないから大丈夫だよ、モトコちゃん」

「突然失礼しました。……なら、彼を呼んでみましょうか？」

「そこまでしていただくわけには」

「いいんですよ、彼も酒が売れるまで故郷に帰れないとぼやいていましたから、稼がせてやってください」

どう見ても何かを企んでいるとしか思えない笑顔でシユラさんは笑っている。

「おお、そりゃいいな。今日はうちで試飲会でもしようか」

おじさんは早くも乗り気で奥さんと呼んで何やら話し始めた。

試飲会。なんて素敵な響き。私もこうしちゃいられない。

「あの！ 私、一度戻ってまた後でお師匠様と来ますね！」

慌ただしくお金を払って酒瓶を抱える。シユラさんに見られているけれど無視よ、無視。

「おお、気をつけてな」

「はい。失礼します」

「アーニヤ、早く早く！」

「待つて待つて」

学校から戻ってきたアーニヤを急かして、私たちは薄暗い道を酒場へと急いでいた。はく息は白いし、首は寒いがこれから温まるの

だから問題はない。

「ふふ、モトコつたらそんなにはしゃいで子供みたいよ？ ニホンシユって、確かモトコが持ってきたお酒よね？」

「そう！ こっちに来てから和風の味に飢えてたからうれしくってアーニヤのご飯もすっごくおいしいんだけどさ、故郷の味って忘れられないじゃない？」

「そうね……。それなら、他にもないか精霊さんに聞いてみたらどうかしら？」

「精霊さんに？」

（呼んだ？）

（呼んだー？）

ふよふよと数人が集まってきた。

聞いてみたら、と突然言われても何を聞けばいいのやら。

「ええ、モトコが皆に聞きたいことがあるんですって」

（なにになー？）

「え、えつと、じゃあ、お米！ お米ってある？」

日本人といえばお米でしょう。ナンのような主食ももちろんおいしいのだが、黄金色の実をつける穀物、あれがあればどんなにうれしいか。

（うーん？）

（うーんうーん？）

（そんな草ないよー？）

「そっかあ……」

やっぱり無いよねえ。

「モトコ、味をもっと良く想像してみて」

私と精霊さんの会話を聞いていたアーニヤが言った。

「味？」

「そう。それは生で食べるの？」

「ううん。炊くの。そうするとつやつやふっくらになって、噛めば噛むほど甘さが出るの。炊きたての匂いといったら、もう」

おこげも好き。炊きたてなら何もかけずに食べるのも好き。梅干し、おかか、昆布や卵をかけたのも好き。いかん、よだれ出てきた。

（あ！ わかったー！）

（あるよー）

（あるあるー）

「え、本当に?!」

（イセンでしょー?）

イセン? え、本当に?

（そうだよ）

（イセンのおあじー）

「ふふ。ほら、もう着くわよ。明日市場にいつて探してみましょ」

「うん!」

この調子なら出汁とかも見つかるんじゃない? 醤油もどきとか! うきうきしながら店の扉を開けると、昼間来た時とは違ってすっかり盛り上がっていた。

「いらつしゃい! 待ってたよ!」

「あなたがモトコさんですね? ありがとうございます!」

入って早々、30代くらいのお兄さんにお礼を言われた。後ろでは店主のおじさんが笑っている。

「え? いえ、どういたしまして?」

「本当にありがとうございます。これで地季までに故郷に帰れます」

「モトコちゃん、こいつが例のキア酒の商人だよ。持ってきた酒、もうすぐ完売しそうなんだ」

「え、私の分は?!」

「もちろんとつてありますよ、何からお飲みになります?」

「いやっほう! 今日飲むぞー!」

シユラさんが空けてくれた席に座って、出されたものをちびちびと味見する。うーん、おいしい。

「お嬢さんは地の国の出身なんですか?」

シユラさんがそんな私の飲み方をみて尋ねてきた。彼の目の前にももちろんキア酒が置かれている。

「いえ、違います。その、もつとずっと、遠い所です」

肴には何かの干し肉がおいてあったが、食べてみるとさきいか味だった。うん。さすが、よくわかってらっしゃる。

「そうでしたか。お嬢さんくらいの年頃の方がキア酒の良さをご存知だとは思わなかったものですから、てっきり地の国の方かと」

「では、ええと、あなたは地の国の方なんですか？」

シユラさん、とも呼べずに聞き返した。

「これは失礼、申し遅れました。私はメイ・ライ、水の国の生まれです。今は冒険者をしています」

「素子・漆原です。魔術師見習いです」

あれ？ 名前、シユラさんじゃなかったっけ？ 偽名かな。

疑問に思っていると、話を聞いていたらしい客が私たちの会話に口を出してきた。

「水の国？ なあ、あの噂は本当なのか？ 今の国王がそろそろヤバいってやつ」

「ええ、床に伏せておいでだそうですよ。ですから今は弟君が仕切っておいでだとか」

「お世継ぎはまだ小さいんだろ？ なら、次の王様はその弟君かねえ」

「街道が荒れなきゃ誰だっついていいさ。帰れなくなっちゃう」
「違うない」

陽気に笑う客たちのほとんどは冒険者なのだろう、あちこちのテールブルでどこの街道に盗賊が出たとかどこの国のお姫様が婚約するそうだとか飲みながら情報交換をしている。

興味もないのでざわめきを聞き流しながら、買って帰るお酒の吟味をする。うっん、ここは辛口かなあ。

「モトコさん」

「はい？」

酔ってきたのか、シユラさんの目元はほんのりと赤くなっていて危ない色気が漂っている。ぐらついてなんかないぞー。確かに今まで出会ったことのないタイプの美形だけど！

「ここでお会いしたのも何かの縁です。しばらくはこの街にいますつもりですので、もし荒事のご依頼があれば格安でお受けしますよ」

そう言っつて、シユラさんはこの近くの宿泊施設の名前を教えてくださいました。ヴァーウエンのように大きな街には長期滞在する冒険者も多いので、そういった人のための施設らしい。

「例えば、そうですね、薄暗い路地に用があるときにでも呼んでください」

喋るな、ということか。釘を刺されずともアーニヤにも言っていない。シユラさんは凄みのある笑顔で私の返事を待っている。まいったなあ。迷惑かけたくないのに、めんどくさそうな匂いしかしない。

「……………それじゃあ、何かあったらお願いします」

私はそう答えることしかできなかった。

1・8 お酒は二十歳になってから(後書き)

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

1・9・精霊さんが笑ってますよ(前書き)

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

今回は一部、気持ちR15ですので苦手な方はご注意ください。

1・9・精霊さんが笑ってますよ

「アーネツカお師匠様」

「な、何かしら？ モトコ？」

「制服着てれば大丈夫だつて仰つてましたよねえ？」

「え、ええ。大丈夫でしょう？」

「どこがですか、どこが」

王族主催の新年会はお城の一角にあるホールで行われている。そこに集まった人たちは皆豪華に着飾り新年会に華を添えていた。制服のローブで出席したのはこのただっ広いホール内でも私たちがくらいだろう。

「入れてもらえたんだから大丈夫よ？」

「もの凄く見られましたけどね」

受付の人に「え？ その格好で入るの？」みたいな目で見られた。ちくしょう。

同じ年頃のお嬢さん方は自分の色に合わせたドレスに身を包み、会場のあちこちで楽しそうにおしゃべりに興じているが、アーニヤはそんなものに興味は無いらしく、校長先生を見つけて早速ご挨拶に向かおうとしている。私も流行を追ったりはしない方ではあるが、アーニヤはさらに無頓着なようだ。

「どこに出会いがあるとも限らないんだからアレくらいの格好しなさいよ」

「結婚する気は無いからいいのよ。放っておいて」

拗ねたように言つて、アーニヤはさっさと先輩教師への挨拶を始めてしまった。

結婚する気は無い、ねえ？ トルイツシュ様は違つのかしら。

「モトコ」

「はい、アーネツカ師」

アーニヤの呼びかけに伝えて私は笑顔を準備する。弟子の挨拶も

師匠の教育の内。しっかりとやりますよ。

どうにか全員の先生にご挨拶を終えて、さあ食べるぞと意気込んだところで優しそうなおじさんに声をかけられた。

「フラノワ殿」

「まあ、フォルテ卿。ご無沙汰しております」

アーニヤが礼をするので慌ててそれに倣う。ご飯はまだおあずけのようだ。

「そちらは、……従者かなにかかね？」

「いえ、弟子です」

アーニヤが答えるとフォルテ卿は改めて私をまじまじと見て、鼻で笑った。むかつくなこのおっさん。

「いや、失礼。しかし、フラノワ殿もお人が悪い。このように将来有望な若者を懐にお隠しになっていたとは」

「……はあ」

ふところに？ 私は隠されていたわけではなくて召喚されちゃったんだけどな。言い回しがよくわからんぞ。隠語かなにかか？

「しかし、斯様な者をお探しでしたならわが子も誰何させていただきましたのに」

フォルテ卿の視線の先には立派に着飾った15、6の少年少女たちが談笑していた。

「光り輝くような日の子でしょう？」

「ええ、本当に」

そうかあ？ アーニヤ位の金髪は見当たらないし、精霊さんも特に騒がしくはない。どの子がそうなのかさっぱりわからない。これが親の欲目というやつか。

「ですが、あの、フォルテ卿のご子息では私程度のものには、その「アーネツカ殿？」

必死に言い訳するアーニヤはその声を聞いた瞬間ぎくりと固まって、顔といわず耳から首までも一瞬でピンクに染め上げて振り返っ

た。なんてわかりやすい。振り返るとアーニヤよりも頭一つ分ほど背の高い男性が大腿に近づいてくるところだった。

「ああ、やはりアーネツカ・フラノワ殿ではないか。久しいな」

「お、お久しぶりです」

ぎこちなく返礼するアーニヤに、周りの精霊さんたちがぐすくすと笑っている。

「おや、フォルテ卿、申し訳ありません。お話し中でしたかな」

「ああ、いや。そういえば君たちは兄弟弟子だったかね」

「ええ、師の死去からは逢っておりませんでしたので、つい懐かしさに声をかけてしまいました」

嘘つけ。ついじゃないだろ。アーニヤが会場に入ってきた時からずっと見てただろ。精霊さん、ずーっとくすくすしてたんだからな。

「もしお話がお済みなら少々お借りしてもかまいませんか？ 積もる話もありますもので」

「ああ、もちろん。ではフラノワ殿、また」

ちらりとフォルテ卿に見られたので曖昧に笑って会釈をしておく。世渡りって大事だと思うんだよね。

連れ去られるアーニヤの後ろをはぐれないようについていくと人気がないバルコニーに出た。出入り口の大きな窓の近くにはフルフェイスの鎧兜で武装した背の高い警備の人がいた。月系統の精霊さんが何人も彼の周りを飛んでいるから、きつと精霊さんに好かれてる性質なんだろう。アーニヤと私以外であんなに月系統の精霊さんに好かれている人も珍しい。後でお話とかできないかな。

アーニヤとトルイツシュ様の邪魔をしないように、私はその警備の人の近くで立ち止まる。ここなら他の人が入ってこようしたときに牽制もできるし。

「久しいなアーネツカ殿、息災か？」

「はい。マグダナル様もお変わりないようで」

何このこそばゆい会話。

(うふふ)

(きやー)

「マグダナル様、ご紹介しますわ。私の一番弟子です」

もつと二人で話せばいいのに。そう思いながらもアーニヤに手招きされたので近づこうとしたら、後ろから腕を掴まれた。振り返ると案の定、それは月系統の精霊さんに囲まれた警備の人だった。

「え？ えつと、あの、マグダナル様……？」

「まったく、君は何を考えているんだ？」

アーニヤは困惑気味にトルイツシユ様を見上げた。それを受けた彼は今夜初めて私を視界に入れて、苦々し気に言った。

「同等の力を持つ者はいえ年頃の男を弟子にするなんて！」

失敬な。確かに顔は少々中世的かもしれないし、胸もアーニヤ程は無いし、化粧もしてないけど、いくらなんでも男と見間違えるとか。ねえ？

「違います、マグダナル様」

好きな男にあらぬ誤解を受けたアーニヤの目からは今にも涙がこぼれそうだ。文句を言ってやろうと口を開いた私は腕を引かれて、反射的に後ろのフルフェイスを見上げた。下がったままのバイザーの間隙から覗く黒く煌く瞳と目が合う。それが合図だったのか彼の周りにいた精霊さんたちが一斉に私にむかってくる。

ぞわり。

つかまれた腕が、痛いくらいに熱い。

いやだ、こわい。

「やめて！」

自由な方の手を振って精霊さんを彼の方へ押し返すと精霊さんが彼に触れた瞬間、彼は壁へ倒れこんだ。腕を掴まれたままの私はそれに抗えず引き寄せられる。壁と私に挟まれた彼を見上げると、もう一度、目が合った。

途端に、何かに体中をまさぐられて体の芯が歓喜に震えた。違う。誰も私に触れてない。腕以外は。

意識した瞬間、そこから熱が伝播したように体が火照る。この感

じ、知ってる。これ、は体中を触られて、期待しているときの、
「や、」

いやだ、恥ずかしい。見ないで。きつくきつく眼を瞑る。なんなの、あの瞳は。宝石みたいな深い、ふかい、
「っ！」

もう片方の腕に触られて、思わず目を開けた。はやく、はなれなくちゃ。はやく、はやくもつとみてやだだめちがうもつとさわっていやもつとだめだったら。
「んっ」

だめ、こんなところで、そんなことしないで。

「んっ……ふぁ」

だめ、やだ。ああ、いやだ。うそでしょ、恥ずかしい。

下着が張り付く不快感に一層羞恥が募る。なのに、もつと、だなんて。
「モトコ！」

後ろからアーニヤに抱きしめられて引き剥がされた。

よかった、放してもらったんだね。泣いてない？ 大丈夫？

「アーニヤ」

何かを言おうと思ったのだけれど、アーニヤの花のような香りに包まれたらなんだか安心してしまって、私は目を閉じた。

目を覚ますと、半泣きのアーニヤと精霊さんたちが私を覗き込んでいた。

「おはようっ？」

体を起こすと、アーニヤの後ろにはトルイツシュ様と先程の警備の人が気まずそうにこちらを見ている。どうやら私は休憩室のソファに寝かされていたらしい。

「モトコ、大丈夫？ どこも痛くない？」

「うん？ うん。平気だよ」

「本当に？」

「ホントホント」

心配性だなあ、アーニヤは。

「ええと、それで、なにがどうなったの？」

「あの人がモトコに術をかけたのよ」

あの人、と言いながらアーニヤはきつ、と後ろを振り返った。

やっぱりそうか。精霊さんが急に集ってきたからそうじゃないかなとは思ってたんだよね。

「いや、術は失敗だった」

初めて警備の人が喋った。くぐもってはいいるが、なかなかの美声だ。

「君に跳ね返されたんだ」

夢中で精霊さん押し返した、あれのことだろう。

「正当防衛です」

「問題はその後だ。返された術は私にかかって、ほんの少し君に漏れた」

「少し？」

あれが？ 少し思い出しただけでも顔が熱くなる、あれが？

「その、たぶんなんだが、相性が良いんだと思う」

相性。あああ、うん、そう。相性、ね。

「一体、何の術だったんですか？」

「……その、下心、を晒すようなものだ」

なぜお前が照れる。恥ずかしいのはこっちだ。なんで出会ってすぐの人間にそんな術をかけられなくちゃならないんだ。お前は変態か。

「へえ」

「いや、私はやめようと言っただが、トリスが！」

軽蔑の目を向けると、変態さん（仮）は慌てて隣のトルイッシュ様を前に押し出した。

「だからって、やりすぎだバカ」

「お前こそ、頭に血が上りすぎだ。あれのどこが男だって？」

「……………」

おいコラ。聞こえてるぞ。

トルイツシユ様はゆつくりと私に視線を戻し、言いづらそうに口を開いた。

「あー、…………その、すまない。彼に術をかけるように頼んだのは私だ。君が、…………男、だと勘違いをして…………妹弟子が、騙されているのではないかと」

うん？ なに？ アーニヤに変な虫が付いたんじゃないかと勘違いしたってこと？ なんだそれ。アーニヤに下心を見せて目を覚まさせようって？

「本当にすまない。その、髪の毛の短い女性というのは珍しいから。それに、君はだいぶ幼く見えるし」

若くではなく幼くときたか。

「君も君だ。その髪は一体どうしたんだ？」

「髪ですか？ 売りました」

「売り…………」

「入学で何かと物入りだったものですから」

鎧の下から絶句するような溜息が洩れた。

なんで髪を切ったことまで非難されなくちゃならないの？ なんだからだんだん腹が立ってきたぞ。

「ね、アーニヤ」

「なに？ モトコ？」

さっきから黙って私の手を握っているアーニヤになるべく優しく話しかけた。

「ちよつと聞きたいんだけど、この国には人に謝る気があるときは名を名乗らず、顔も見せない風習でもあるの？」

「まさか。そんな風習、この世界にないわ」

珍しく怒気をまとったアーニヤの声音にぎくり、と男二人が反応

してわたわたと兜を脱ぎ始める。

「あー、その、紹介させていただけでも、よろしいか？ 私はトル
イツシュ・マグダナル、アーネツカ殿の兄弟子に当たる。そしてこ
いつは同僚のアンザス・ネルワ」

「どうぞよろしく」

フルフェイスの下は、思ったよりいい男だった。いや、正直に
言うと相当なフェロモン系だった。直に聞く声は腰にくるものがあるし、後ろで一つに縛った紫色の長髪は自分でもわかってる感があるが悔しいことによく似あっている。だがしかし、甘いマスクには騙されんぞ。

「では、私からも改めて紹介させていただきます。一番弟子のモト
コ・ウルシバラです」

「はじめまして、マグダナル様、ネルワ様。座ったままで失礼しま
す。まだ少し気分が優れないものですから……」

無論、嘘である。

「それで、私の疑いは晴れたのですか？」

「あ、ああ。もちろんだ」

「さ、モトコ、今日はもう帰りましょう？ 初めて術を返したんだ
もの、疲れたでしょう？」

いや、さつきまで寝てたから元気なだけだなあ。

「初めて？ 初めてで、あそこまで？」

「ええ、何か？」

ネルワさんの疑問を有無を言わず笑顔で封じてやる。あんたが喋ると色々と思いついて恥ずかしいからちょっと黙っていてほしい。というか、思い出したらまたむかついてきた。これはあれね。埋め合わせをしてもらわないと腹の虫が収まらないわ。

「ね、アーニヤ、どうする？ あなたの兄弟子様はどうしてもあなた
たが心配でちよっーと道を踏み外しかけたみたいよ？」

笑顔で言外に『この外道！』と罵ると、全員が顔を青くした。

「い、ごめんね……？」

「あー、その、とても申し訳ないことを」

「謝罪はさつき聞きました」

「許すかどうかは別である。」

「あーあ、おいしい料理と美味しいお酒食いつぱぐれちゃったなー」

普段アーニヤが作ってくれる家庭料理とはまた違った豪華な料理と高そうなお酒が並んでいたテーブルを思い出す。結局一口も食べられなかった。

「……」

「アーニヤがドレスコード教えてくれなかったから恥かいたしー」

「あう」

「おなかすいたけど食欲無いなー」

駄目押しにため息を吐いてみせる。

ちよつとやりすぎたかな、とも思ったが私が言いたいことは伝わたらしく、トルイッシュ様とネルワさんが顔を見合わせた。何やら二人でこそこそと話し合っていたが、やがてトルイッシュ様が私たちに言った。

「……明後日の晩、もし予定が空いていればぜひお二人を食事に誘わせていただきたい」

「まあ、そんな」

白々しく驚いてみせる。アーニヤは本当にびっくりしてたけど。

「個室をとるが、一応ドレスコードのある店にしようと思う」

「ですって。良かったわね、アーニヤ」

「う、うん……?」

話についていけないのが、目を白黒させながらアーニヤは頷いた。可愛いなあ。アーニヤの返事を聞いていたトルイッシュ様が片眉を上げたが、気にはしていない。今のアーニヤは私の味方だ。

「では月頃、迎えに行こう」

「よろしく願います」

帰ったらアーニヤで着せ替えしなくちゃ。

1・9・精霊さんが笑ってますよ（後書き）

R15では不適切だと思われましたら、お手数ですがご一報いただければ幸いです。

1・10・初恋をこじらせた

2頭立ての馬（と呼ぶことにする。どう見ても馬じゃないけど）車は時間通りに我が家の前までやってきた。乗っているのはもちろんトルイツシュ様とネルワさんだ。

「こんばんは」

「本日はお誘いいただき、ありがとうございます」

「……いや、こちらが非礼を働いたのだ。当然だ」

家から出てきたアーニヤを見て、トルイツシュ様は一瞬言葉に詰まったようだった。そうだろう、そうだろう。何せ今日のアーニヤは私の自信作だ。思う存分見惚れるがいいわ！

アーニヤのクローゼットを漁ってやっと出てきたひざ下丈で黒のAラインのノースリーブワンピースに、白い薄手のボレロ。買ってから一度も付けたことがないというゴールドのネックレスト、滅多に履かない真紅のヒール。普段は一つに括っただけの髪もアツプにまとめ、お化粧だって唇がふっくらと見えるように頑張った。クラッチバッグには魔法陣が仕込んであるので温度調節もばっちりである。

どれもこれも地味な服ばかりの中からどうにか選んだコーディネイトだ。

アーニヤにはトルイツシュ様が、私にはネルワさんが当然のように手を貸してくれて馬車に乗り込んだ。

「フラノワ師、今日は一段とお美しい」

「いいぞ、ネルワさん！ もっと褒め讃えろ！」

「君も、今夜はずいぶんと見違えたね」

「ありがとうございます」

私の方はフリルのついたシャツにアーニヤの持っていたマキシ丈の生成りのスカートを何箇所か留めて、バルーン風のチューブトップワンピースもどきにしたただけ。髪も適当に編みこんでリボン

つけておしまいにした。

馬車に揺られて世間話をしながら向かいの男性陣の衣装を観察する。

トルイツシユ様は髪と同じオレンジ色の刺繍の入った白いジャケットにこげ茶のパンツ。シンプルだが全体的に高そうな印象を受ける。服の上からでもわかるがっしりとした体は精悍な顔つきもあって、思わず兄貴と呼びたくなる。そんな彼の紫の瞳は先ほどからアーニヤしか見ていない。

ネルワさんは襟の立った黒のジャケットに黒のパンツ、と上から下まで黒づくめだ。動くたびにさらさらと音を立てて流れる紫の髪が非常に妬ましい。シャンプーは何を使ってるんだろう。

程なくして馬車は私たちを大きな屋敷の前に降ろした。看板も何も出ていないが、どうやらここがレストランらしい。屋敷に入ると制服をきつちりと着こなした初老の店員さんが笑顔で出迎えてくれた。天井の高いエントランスを抜けて、高価そうな調度品の飾られた広い部屋に通された。もしかしてこのお店、お高いんじゃないだろうか。そういや、ドレスコードのある店にするって言ってたもんね。はっはっは。……大丈夫かな、私。

料理もお酒もデザートも最高だった。店の雰囲気も良い。給仕さんたちの教育も行き届いていて私とアーニヤを見ても眉一つ動かさなかった。

「それにしても、トリスの妹弟子がこんなにかわいい人だとは思わなかったな」

「か、わいいだなんて、そんな……」

ネルワさんに微笑みかけられたアーニヤは何うようにトルイツシユ様を見、ぱつと頬を染めて下を向いた。今夜も酒がうまい。砕けた調子でネルワさんは続ける。

「トリスの妹弟子ならこれからも付き合いは長くなりそうだし、アーニヤちゃんって呼んでもいいかな？俺のこともアンザスでいいしさ」

「そ、そんな」

「ね？」

「え、ええつと、その」

アーニヤは助けを求めるように私を見た。しょうがないなあ。

「お歳も近いようですからいいんじゃないありませんか？」

ネルワさんはこの中では一番年上だろうがそれでもせいぜい3、4歳の差だろう。その彼がいいと言っているのだ。反対する人がいないなら、お言葉に甘えさせてもらえば良い。自然と3人の視線がトルイツシユ様に集中する。

「……当人たちが良いならいいのではないか？私が口をだすことでも無いだろう」

「そう、ですね……」

あーあー、もう。人前では遠慮して『マグダナル様』って呼んでるけど本当は昔みたいにな『トリス様』って呼びたくて家では未練がましく『トルイツシユ様』って呼んでるくせに、引き下がるな！攻める！

「その話で思い出したが、ウルシバラ君、師匠を愛称で呼ぶのはあまり感心ないな」

今日はずつとアーニヤのことを『アーネツカ師』と呼んでいたから、この間の新年会のことのことだろう。

「そうですね。気をつけます」

「いえ、マグダナル様、いいんです。その、迷惑もかけていますから……」

「迷惑だなんて！私の方こそ助けてもらってばかりじゃない」
言っていないこともあるし。

アーニヤと見つめ合っているとネルワさんが首を傾げた。

「二人は歳が近いの？」

「え？ ええ」

「同じ年ですけど？」

「ああ、やっぱり。そうじゃないかなと思ってたんだよね。あれ、でもモトコちゃんは今度ヴィアン校へ入学するんだよね？」

「誰がお前に名前で呼んでいいって言ったよ。こーゆー妙に馴れ馴れしい人って苦手なんだよなあ。」

「はい、そうです」

「あの学校へは15歳で入学するのが普通だって聞いた気がするけど……？」

「いや、15でなくとも実力があれば入れる」

「トルイツシユ様が確認するようにアーニヤを見ると、先程からじつと彼を見つめていたアーニヤは慌てて下を向く。」

「ふーん。実力重視って本当だったんだ……フラノワ師」

「それを面白くなさそうに見ていたネルワさんは急に畏まってアーニヤに呼びかけた。」

「できればきちんと謝りたいのですが、ちょっとお弟子さんをお借りしても構いませんか？」

「……本人に、聞いてください」

「アーニヤは心配そうに私を見て答えた。ネルワさんはちよつと驚いてから、私に向かって笑顔で目配せをしてきた。謝りたいと言っている相手を邪険にもできない。」

「ええ、では」

「エスコートされてレストランの中庭に降りる。小さなベンチにすぐ立てるように浅く腰掛けた。」

「ね、それでさモトコちゃんって、いくつ？」

「私の顔を覗き込むその表情は答えてもらえるという自信に満ちたものだ。背後の中庭の植木と相まって非現実的な雰囲気すら漂う。」

「ははっ。ウゼえ。謝りにきたんじゃないの？ 女性に歳を聞くの？ それとも口のきき方知らないの？ 聞けば答えてくれるのが当たり前なの？ 女の敵なの？」

「いくつに見えますかあ？」

個人的に一番ウザいと思っっている返しをお見舞いする。参考資料は友、いや、知り合いだ。

「うーん、18歳くらいかな」

「ハズレでーっす」

私に答える気がないのがわかったのか、彼はその長い脚を組んで空を見上げた。だめだ、いちいち行動が鼻につく。偏見をなるべく持たずに生きていきたいのに、これじゃいかん。私はネルワさんと同じように空を見上げ、感嘆の溜息を吐くふりをした。

「アーニヤちゃんつて、もしかしてトリスのこと好き？」

「見ての通りだと思いますけど。マグダナル様の方こそアーネツカ師を好きなんでしょうか？」

「それも見ての通りじゃないかな」

一体何が面白いのかネルワさんはサラリと長めの前髪を掻き上げて笑った。あ、やっぱりだめだ。なんかイラっとくる。

「ええ？ そうですかあ？」

「……モトコちゃんさ、もしかして俺のこと嫌い？」

「ええっ！ まさかあ！ そんなことないですよ！」

両手を肩の前辺りで横に振りながら体を若干後ろに引く。もうこのままバイバイしたい。

「そう？ でも歳も教えてくれないし」

「だってえ、恥ずかしくてえ」

「じゃあさ、ゲームしない？」

「ゲームう？」

「そう。俺がモトコちゃんの歳を当てるの。質問は3回までで、モトコちゃんはハイかイイエでしか答えなくていい。歳そのものを聞くこともしない」

「うーん、じゃあ、ルールに付け足してもいいですかあ？」

「なんだい？」

「回答権は一度きりでえ、間違えた場合はあ罰ゲームですう。いい

ですかあ？ ではどーぞあ」

ネルワさんはじいっと私を見ながらそうだなあ、なんて言っている。なんでもいいからさっさとこのゲームとやらを終わらせて戻ろう。

「処女？」

うん？ なにそれちよつと待って、予想の斜め上だよ？ もうちよつと普通の質問しなさいよ！

非難を込めて見つめ返すと、「え？ なに？ 聞こえないよ」と白々しく耳を近づけてきた。ちよつと待って、もしかしてこの敵は一枚どころか数十枚くらい上手なんじゃないか？

「……イイエ」

「気持ちよかった？」

ぬかった……！ そうだよ、これだけのフェロモン系だもの、世の女性が放つとくわけないじゃないか。この手のゲームを装ったセクハラには慣れっこに決まっている。ちくしょう。

しらばくれてやりたいが、どう答えても自分の首を絞める結果しか思い浮かばないので素直に頷いておく。

「じゃ、最後。この間は、ごめんね。……許してくれる？」

……ずるいなあ。ネルワさんにじつと見られて、今度は隠さずに大きなため息を吐いた。

「……いいですよ、別に。ネルワさん美形ですし、本当にされたわけではありませんし」

気持ちよかったし、処女でもないし。……うん？ ああ、そうか。だから聞いたのか。意外と不器用な人だなあ。

「ああいうことは初めてでしたけれど、長い人生一度くらい……も普通は無いですけど、まあ、事故にでも遭ったと思っておきます」

「ありがとうございます？」

ネルワさんは笑顔で首を傾げた。鈍いのか器が広いのか判断に悩む。

「それで、お答えは？」

「……20歳、かな？」

「ハズレです。そろそろ戻りませんか？」

「罰ゲームは？ いいの？」

全然考えてなかった。難癖付けたくてなんとなく言っただけだからな。自分から罰ゲームを御所望とは、なかなかマゾヒストだな。「……じゃあ、私も敬語じゃなくていいですか？」

「仰せの通りに……ね、戻るよりさ、今から二人で抜けない？」

笑いながらネルワさんは狭いベンチの上で距離を詰めてきた。腰に回された大きな手のひらが温かい。私の映る黒い瞳から目が逸らせない。

「相性、確かめてみない？」

それはベッドで、ということか。ずいぶんと安くみられたもんだ。気合いで視線を下へずらしてその腕にそつと自分の手を乗せた。

ゆっくりと彼の目を見る。

「っ！」

かかった。

そんなに強く握っていたわけではない私の手はすぐに振り払われた。彼の目は見開かれていたが確かに潤んでいて、目元は赤くなっている。そんなに驚くことでもないだろう。ただ彼にされたように術をかけただけだ。といつても私には他人の下心を覗くような趣味はないし、そんなに高度な術はまだ使えないので性欲を強くする程度の効果しかないだろうとアーニヤは言っていた。だがまあ、その反応を見るかぎり十分だろう。

「かわいいんですね」

くすりと笑ってやれば朱のさした目元がさらに染まった。いい気味。

「すみませんね、安売りしたくないお年頃なんで」

席を立つ。背中で視線を遮ったことにして、顔が火照るのは一昨日の夜を思い出したからだと言い聞かせた。

食事をしていた部屋に戻ると、精霊さんたちがアーニヤとトルイツシュ様の周りをくすくす笑いながら飛び回っていた。なんだろう。

(トリスがねー)

(あ、モトコー)

(しーっ！)

(うふふー)

どうやら何やら楽しい事が始まっている様子。これは出歯亀せねば。

俯いたまま小さく震えているアーニヤの顔を見ながらトルイツシユ様は緊張した面持ちで口を開いたり閉じたりしている。

「その、」

かすれた声が二人しかいない部屋に響く。アーニヤは肩を揺らし、視線だけ上げて、すぐに戻した。見える素肌は余すところなく赤い。

がんばれ！ へタレ！

(へたれー?)

(れっれー)

「君さえ良ければ、」

いけー！ 男を見せるー！

(おー)

(がんばれー)

(きゃーきゃー)

「また昔のようにトリスと呼んでは、くれないか？」

そこじゃ！ ねーだろ！ 言いたいことは！

「え、あ、……よ、よろしいの、ですか？」

「勿論だ。私も、君をアーニヤと呼んでもいいか……？」

「はい、勿論です」

うん、まあ、ね。アーニヤが幸せなら私はいいよもう、それで。

うん。本当だつてば。

(おめでとー)

(やったねトリスー)

(わーい)

精霊さんのお祝い具合いからして、本当にそれが気がかりだったらしい。トルイツシュ様の邪気のなさには本当に恐れ入る。そうか、私が汚れているのか。

頬を紅潮させて瞳を潤ませたアーニヤは今すぐ抱きしめたいくらいに可愛い。むしろ私が抱きしめたい。

「先は長そうだな」

そのセリフには同意するが、腰を撫でるのはやめる。

1・10・初恋をこじらせた(後書き)

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

2・1・金髪美女に縁がある

3人掛けの長机が1脚、生徒用の古い椅子が2脚、教卓が1脚、先生用の古い椅子が1脚。以上が私の通う1年3組に存在する設備である。黒板すらない。初めて教室に入った時は新手のいじめかと思った。

本来は長机があと3つは入るだけの広さがあるが、今年の3組は私を入れて2人なので長机は1つしか出されていない。3組が少ないのは例年のことで、上の学年は6人、更に上は4人とあまり大差ない。一番多いのは2組、次いで1組だ。このクラス分けは実力ではなく、庶民と机を並べる事を良しとしない貴族の坊ちゃん嬢ちゃんの心象を考慮した上で、1組は貴族階級、2組は騎士や商人のような金持ち、3組は庶民、と割り振られているに過ぎない。

教室だつてもちろんクラスによってグレードが異なる。この目で見たわけではないが、数年前に教室清掃のアルバイトをしていたアーニャによれば、1組の椅子はとてもふかふかで気持ち良さそうだったそうだ。ちょっとうらやましいが、このくらい質素なほうが覚えのある教室らしくて私は楽しい。

ちらりと横目で隣の席のフィーナを伺うと、とても真剣な表情で教師の話をしている。その15歳らしい表情がとても眩しい。

彼女はフィーナ・ホルマー。私の唯一のクラスメイトで友達だ。容姿端麗成績優秀、人を外見で判断せずいつだって他人に親切でその所作はどこか気品すら漂う。15歳らしく丸みを帯びてきた体つきは陽の光を知らずに育ったのではないかと疑うほど白く肌理が細かい。見事としか言いようのない、腰まで伸びたまっすぐな金髪とルビーのように赤い勝気な瞳。年相応に愛らしいその顔を初めて見たときはどこのアイドルかと思ったほどだ。唯一の欠点らしきものといえば、家柄の低さだろう。彼女は特に何の後ろ盾も持たない庶民出身のただ魔術師としての素質が有り余る美少女だ。

「フィーナ！」

「あら、エル。そんなに慌ててどうしたの？」

滞り無く1時間目の授業が終わり、先生が教室を出るとそれを待っていたかのように一人の少年が3組の教室に転がり込んできた。

フィーナに微笑みかけられて少年はほんのりと頬を染めたが、すぐに我にかえって口を尖らせた。

「今朝、ダイン先輩と一緒に登校したって本当？」

「やだ、見たなの？」

「俺は見えないけどクラスの女子が騒いでた。白のプラインに二人乗りしてたって」

プライン、とは例の馬もどきである。駆けるのには向いているであろう長い脚は馬のようだと表現しても差し支えはないだろうが、大きな体は記憶にある馬より縦にも横にも大きいし首だつて短い。足から上は牛やイノシシに近いんじゃないか。馬の外見を克明に覚えている自信はないが、もうちょっと慎ましやかなサイズだつたはずだ。

黒や灰色が一般的なプラインの色だが、その白を乗りこなして登下校するダイン先輩はこの学校ではちょっとした有名人だ。私も乗っている姿は一度しか見たことはないがよく覚えている。

「今朝はちよつと遅刻しそうだったんだけど、ダイン先輩がご親切で乗せてくださったの」

「へえ？ フィーナが遅刻なんて珍しいな。どうしたんだ？」

「道を聞かれたから教えてあげただけど説明の仕方が悪かったみたいで全然理解してもらえなくて、仕方ないから一緒に広場まで行ったの」

「広場？ それってフィーナの家から反対方向じゃなかったっけ？」

「ええ、そうなの。だから今日は危なかったわ。後でもう一度ダイン先輩にお礼を言いに行かなくちゃ」

「一回で十分だよ！」

「そう……？」

「そうそう！ それより早く昼飯にしよーぜ、ほらモトモ」
「うん」

愛しい少女とのランチがよほど楽しみなのか少年は屈託なく笑って見せた。

少年はエルオル・グレン。2組の生徒で、フィーナの取り巻きの一人だ。騎士の家の子供で、金の髪に暗い赤色の瞳。噂では歳の割には剣の手練であり将来は親と同じく騎士になるのが夢だとか。明るくて気易い、今はやんちゃな印象の抜けない少年だが、そこがまた良いと女子に人気らしい。

中庭に出て日当たりのよい草の上で輪になって銘銘がお弁当を広げる。今日のメニューはフィーナと私は例のナンに野菜を挟んだクレープのようなもの、エルオルはロールパンもどきのサンドイッチだ。ロールパンもどきはもちもちとした食感のお腹にたまりそうな食べ物で、彼はそれを3つも食べる。

私のお弁当は朝ごはんを作る傍らで作りおきの具材と野菜をナンで巻いただけのものだ。授業の始まった風季から1季の間作り続けた結果、私だつて少しは上達したのだ。最近はややく（茶色い）ご飯も上手く炊けるようになったし。余談だが、こちらの米であるイセンという植物は茶色かった。白くはないし大きさもソラマメ大だが味は完全に米なのだから文句はない。……ないったら。

最初の頃、お弁当を持ってきていたのは私だけで昼時は皆で食堂へ行っていたが、食堂では1年生のしかも3組はどうにも肩身が狭いのに加え、食堂を利用しない私が席につくため周りの視線が痛かった。そこでフィーナがお弁当を持参するようになり、エルオルもそうするようになったのだ。私がお弁当を持参するのはもちろん我が家の台所事情のためだが、貴族であるダイン先輩の家に居候しているというフィーナが持つてきてくれたときは友達になれた気がしてなんだかうれしかった。

庶民であつてこの学校に入学しようという人間は、入学金や街中での住居の確保に貴族や騎士の援助を受けている者がほとんどだ。

援助をする側は将来的に優れた魔術師に恩を売ることができ、養子縁組や結婚することで魔術師としての自分たちの家系をより優れたものにもできる。そのせいで2組には親が庶民出身の魔術師である子供が多く、逆に3組は両親が魔術師という子供は滅多にいない。3組の生徒が少ないのもそれが大きな理由だろう。

「なあ、もうすぐ祭りだろ？ 一緒に回らないか？」

「行きたい！ ね、モトコも行くでしょう？」

「うん。行く行く」

フィーナに聞かれて笑顔で答えた。10歳も年下の同級生たちにいじめられたら怖くて仕返ししちゃうかも、と思っていたのが嘘のような光景だ。平和なのは良いことだ。もちろん、私の歳は告げていない。年上であることは薄々感じているようだが、面と向かって尋ねてくることはない。どこかのフルフェイスの騎士様とは大違いである。

この世界の暦は6つの系統を季、節、中で組み合わせで作られている。そして節（週）に1日は休日が設けられているのだが、その中（曜日）は季（月）によって異なる。地球の暦でいうと、月ごとに休みの曜日が異なるのだ。非常にめんどくさいが、系統の揃う日は精霊さんが活性化するので術が効きすぎたり効きずらかったりと魔術に頼っているこの世界では仕事に支障が出るのだ。季に一度の季節中すべてが揃う日はその系統の祭りとして祝う風習があり、その前後1日も休日になる。更に年末年始は誰も仕事をしたくないらしく、まるまる2節が休みだ。

この世界には6つの国があり、それぞれが系統を冠していて、重複はない。各季の祭りの中でも特に1年に1度の自国の系統のものは国を挙げて祝われるのだ。エルオルの言う祭りとは今度の休日である日季節日中を含めた3日間に渡って行われるこの祭りのことだ。

「3日あるけど、いつにする？」

「2日目にパレードがあるんでしょ？ そのときは？」

「あ、ごめんなさい。私、2日目はちょっと……」

フィーナが申し訳なさそうに言葉を濁した。

「先約でもあるの？」

「ううん、その、家のほうでちょっと、抜けられないから」

「そっか。貴族の家ってなんかいろいろあって忙しいんだろ？」

フィーナがあいまいに頷くのでそういうものかと納得して口の中のものを飲み込んだ。

（ねーねー）

（モトコー、モトコー）

うん？ なーに？

普段はそのあたりの木陰で追いかけてこやかくれんぼをしている精霊さんが、神妙な顔つきで話しかけてきた。そちらへ顔は向けずに心の中で返事をする。

アーニヤの教えに従って、私は精霊さんとお話ができるという事実をひた隠しにしていた。普通ではないということとはただそれだけで畏怖の対象となりうる。そうやって人間は自分たちを守ってきたのだから当然だろう。

（大変なの）

（シュラが）

（たいへーん）

（泣いてる）

（ちがうよ、殺してやるって）

（帰れないから）

（いつも泣いてるよ）

（認めない）

（戻れないから？）

（ころして）

待つて待つて。なに？ シュラさんが？ 泣いてて？ 帰れなくて戻れなくて認めないから殺してやるって？

（そー）

うーん、一生懸命教えてくれたのに悪いがよくわからない。

(シユラが、シユラが)

誰を？

(おうさま)

王様を？ 殺してやるって？ まさか。

「モトコ？ ぼんやりしてどうかしたの？」

「うん、ファイデン家のご子息に声をかけてもいいものか悩んでた」
私が視線で示した先には片手に大きなバスケットを持ってやたらと不機嫌そうな紅顔の美少年が立っていた。

先ほどから出てくる機会を窺って近くをうろろろしていたこの少年の名前はリカルド・アリタシュ・ファイデン、1年1組で学ぶ地の国出身のお貴族様だ。

肩まで伸びた真っ直ぐな黄緑色の髪はさらりという音が聞こえてきそうなほどで、色白の肌は神経質そうな青緑色の瞳と相まって品のある顔を彩っている。

「リカルド！ ずいぶん遅かったのね」

「ああ、授業が長引いたから」

フィーナにだけ素っ気なく言って、リカルドは当然のようにフィーナと私の間に腰をおろした。フィーナからは見えないようにエルオルと私を睨む彼もまた、フィーナ狙いである。

彼らとの出会いは入学式にさかのぼる。

式が肅々と進み、新入生代表の挨拶も終わりに差し掛かった頃のことだった。

「そんなはずない！」

突然近くの席で上がった怒号に、学校なんて通うの何年振りだろ。専門学校は2年だったし、5年ぶりくらい？ うわ、大丈夫かな。なんて呑気に考えていた私は一気に現実に引き戻された。

「いいえ。あなたが間違ってるわ。問3の答えは『ホル』！」

「んなわけあるか！ 絶対に『ラウ』！」

どうやら、入学試験の筆記問題の答えが食い違ったらしい。基本的に入試の答えは配布されないものでどちらが正しいとも言い切れないが、男子生徒の方は2組、女子生徒の方は3組だった為か周囲は男子生徒を応援する流れになっていた。隣の席で始まったしまった喧嘩に私はどうする事もできず、他の生徒たちと同じように他人のふりをして眺めていた。悲しいかな、そういう態度は得意である。慌てて教師が仲裁に入る。彼ら2人は式を退席するようだった。おそらくはその先で答えを聞くのだろう。

「問3で、なんだっけ？」

「最古の幻想種の名を、契約者の名とともに答えよってやつだよ」
精霊さんたちに答えを教えてもらうまで見当もつかなかった私は違う試験で良かったと安心した。ちなみに正解は女子生徒のほうらしかった。

式も終わる頃、件の2人は晴れ晴れとした表情で戻ってきた。入試の答えについてはどちらも口にしないが、何故だか2人は先ほどまでの険悪な雰囲気や嘘のように笑っていた。

そんな2人に周りは何を思ったのか知れないが、首席入学者として壇上に立っていた少年、リカルドが殺気にも似た視線を3組の女子生徒に向けているのを見て、私は噂が本当だったことに思い当たった。

曰く、「今年の首席は3組にいる」。

2組の生徒であるエルオルに食って掛かった3組の女子生徒、フイーナこそが今年の首席入学者だった。

3組の生徒が首席だった場合、次点の生徒に譲られるのが常だとアーニヤが言っていた。入学式の忙しい朝になんで突然そんな話をしたのかと思っただが、なるほど自分と同じ境遇の人間がいると言いたかったのかと納得したものだ。

その後、すっかりエルオルと仲良くなったフイーナはクラスメイトである私に彼を紹介してくれた。彼は開口一番、「モトコって、女みたいやしやべり方するんだな」と言った。面白そうだったので

しばらく男のふりをしていたが、女子トイレに入るところを見られて早々にバレた。

ダイン先輩とはフィーナと一緒に帰るときに正門で偶然会ったので紹介してもらった。今度は「唯一の級友が女子で心強いです」とフィーナが紹介してくれたので勘違いはされなかった。ただ、その一言があるまでは上から下まで不躰に観察され、非常に居心地が悪かった。

リカルドはある日彼の方から「僕はリカルド・アリタシュ・ファイデン。ハルン国ファイデン家が嫡男だ」と声をかけてきた。ちょうど食堂に向かう途中で急いでいた私たちはうっかり素通りしそうになった。式典での挨拶はできても、『庶民への声のかけ方』はご存じないらしい。初めて間近でフィーナを見て赤くなった後、彼女の後ろにいたエルオルと私を睨みつけ、「覚えておくように」と言い残して去って行った。しばらくの間私たちの間で「覚えておくように」というセリフが流行したが、他意はない。何回かに一度はお昼を食べているところに彼がやってきてはなぜか一緒に食べるということを繰り返し、今では4人で食べるようになった。確かめてはいないが、おそらく彼はいまだに私が男だと勘違いしている。

あまり認めたくない事実ではあるが私は入学してから男に間違われることが非常に多い。おそらくは髪の長さや普段の格好のせいだろう。私ほど髪の短い女子生徒はいないし、制服のローブの下はいつも丈の長いパンツだ。ストッキングなしでスカートを穿くのは抵抗があるのだからしかたない。

……あとはまあ、胸のサイズもその一因かもしれない。一応これでも日本人女性として平均値を誇るつもりでいたが、ないわけじゃないと思っていたのは私が日本人だからなのだとこちらへ来て思い知らされた。アーニヤは言わずもがな、帰るまでに一度はその重さを確かめさせてもらうとして、フィーナの胸囲は少なく見積もっても私よりワンサイズは上だ。まだ15歳だからこれからもっと大きくなるだろう。日本で店員さんが薦めてくる下着のサイズ、どうも

大きいような気がしていたけどやっぱりそうか、本当はこもないんだな。うん、でもわかった。そんな気がしてたんだ。

「モトコ、お前どこを見ている？」

気づくと、私はフィーナの胸元を凝視していた。いかんいかん。これじゃあただの痴女じゃないか。

「胸」

「おまえっ!!」

顔を赤らめたりリカルドが私に掴みかかる。

「ちよつとやめてよ。下着ずれちゃうじゃない」

「ああ。……は？」

私のセクハラ発言にリカルドはすぐに手を放し、怪訝な顔をした。育ちの良さってこういうところに出るよなあ。

「ねーねーフィーナ、何食べたらそんなに大きくなるの？」

「そ、そんなこと聞かれても……」

「生まれつきかー。ちくしょー。あ、デザート半分こしよ？」

「ええ」

エルオルはフィーナと私を見てにやにやと笑いながらリカルドの肩に手を置いた。

「リカルド、あのな、モトコは、女だぞ？」

「……………あ、ああ。……………そうか」

15歳って素直じゃないけど正直でかわいいなあ。

2・1 金髪美女に縁がある（後書き）

アクセス、お気に入り登録、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5300y/>

candy days

2011年12月11日19時46分発行